現地編輯

THE NORTH CHINA

3 2

TIEN TAN, THE TEMPLE
OF HEAVEN, PEKING

天壇

汽車が北京に近づくと城壁が見え、やがて城門が見え、車窓の左、綠樹の彼方に三段圓屋根の不思議な建物が見える。これが天壇の祈年殿である

北京驛に下りて驛前に聳ゆる皇城の正面すなはち正陽門と箭樓―俗に前門の前に立つと、そこから眞南にのびる前門大街の遙かなる彼方に永定門が霞んで見える。正陽門と永定門との略中間に天橋―東京なら淺草―があり、その東南に隣合せて、朱塗の壁を繞らしてたのが即ち天壇の外墻である

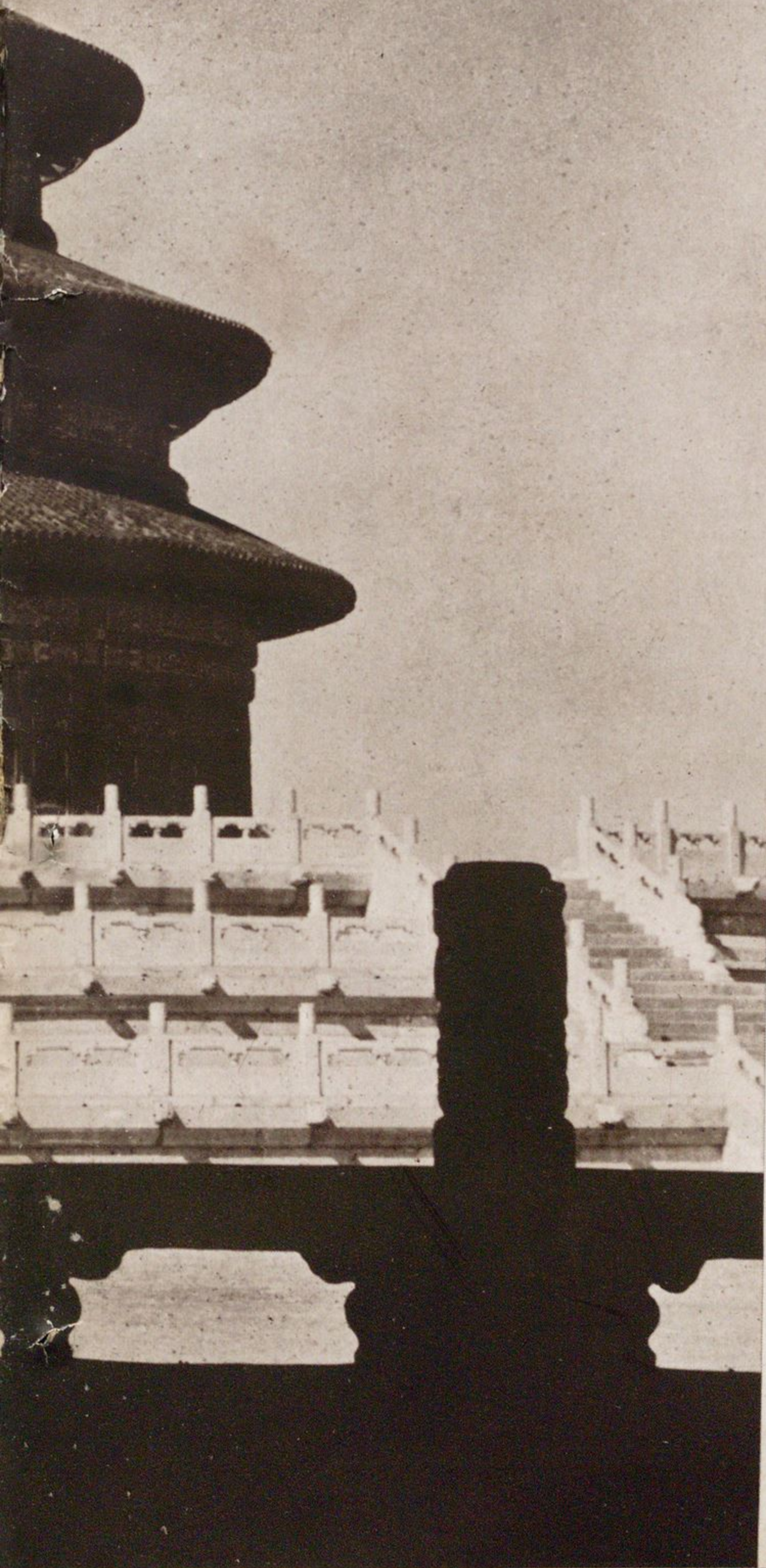
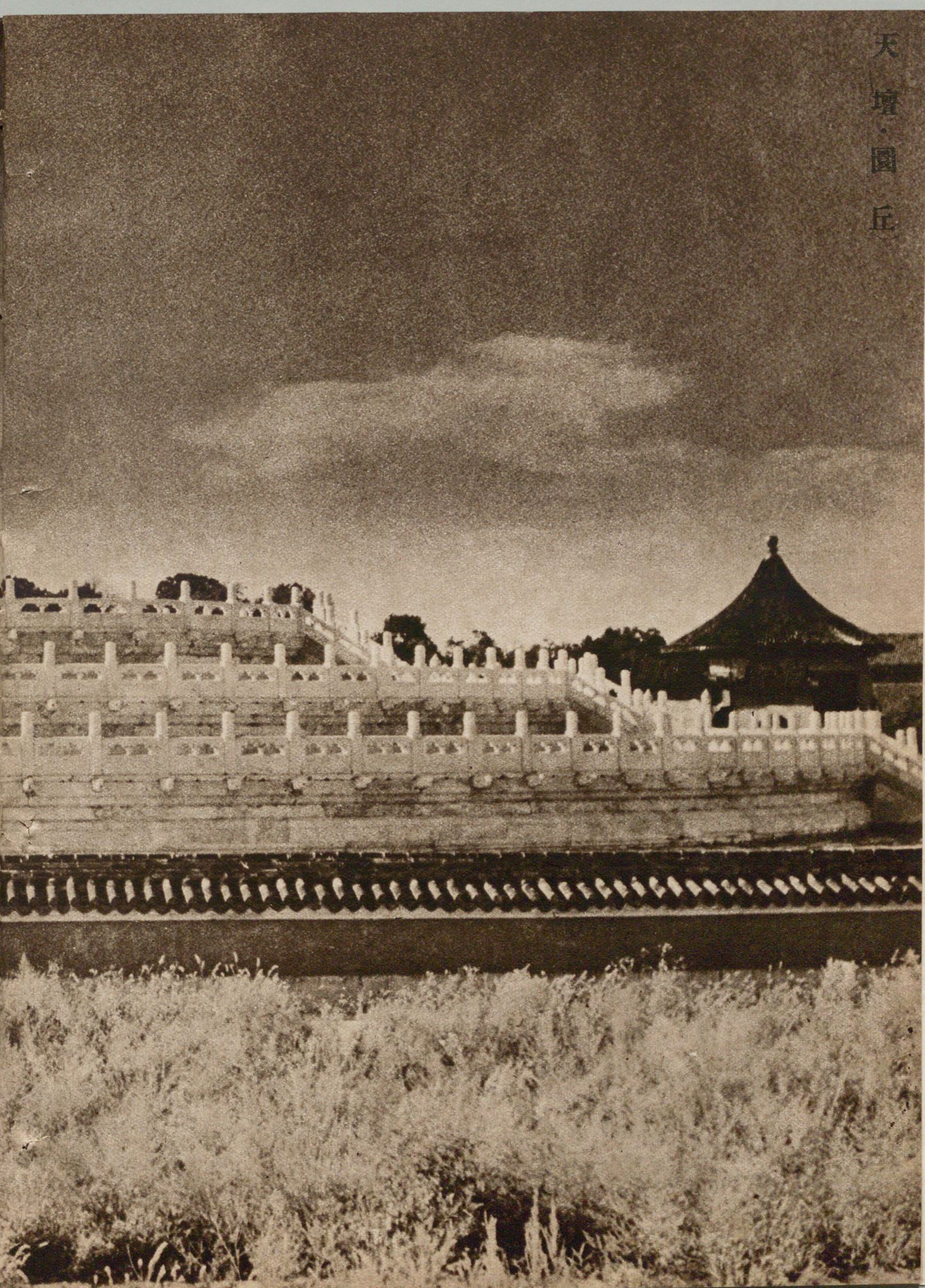
外墻の周圍約六キロ、面積約八十一萬坪といふからその廣大さも知れよう

昔北京城の内外には九つの天子の祭壇があつて――天壇、地壇、日壇、月壇、社稷壇、先農壇、天神壇、地祇壇、先蠶壇――各々祭祀が行はれてゐたもので天壇はその中のナンバアワンである。從つてその規模も一番大きい

天壇は即ち天子親しく皇天上帝を祀られたところで、明の永樂十八年（皇紀二〇八〇年）の竣工。前清光緒十五年（明治二十五年）雷火に燒けた祈年殿を再建した外は一切明の舊規である。もとより帝政時代は庶民の出入を禁じられてゐたが、民國以來開放された

さて門側の售票處で觀覽券を買つて入ると東に向つて眞直な徑が開かれ、その向うにもう一つの墻が見える。これが内墻だ。一帶は古柏老樹鬱蒼として閑寂な雰圍氣、そこを右折して橋を渡ると長廊の間に門がある。門内は齋宮と云ふ大殿で祭祀の前夜天子宿して齋戒されたところ

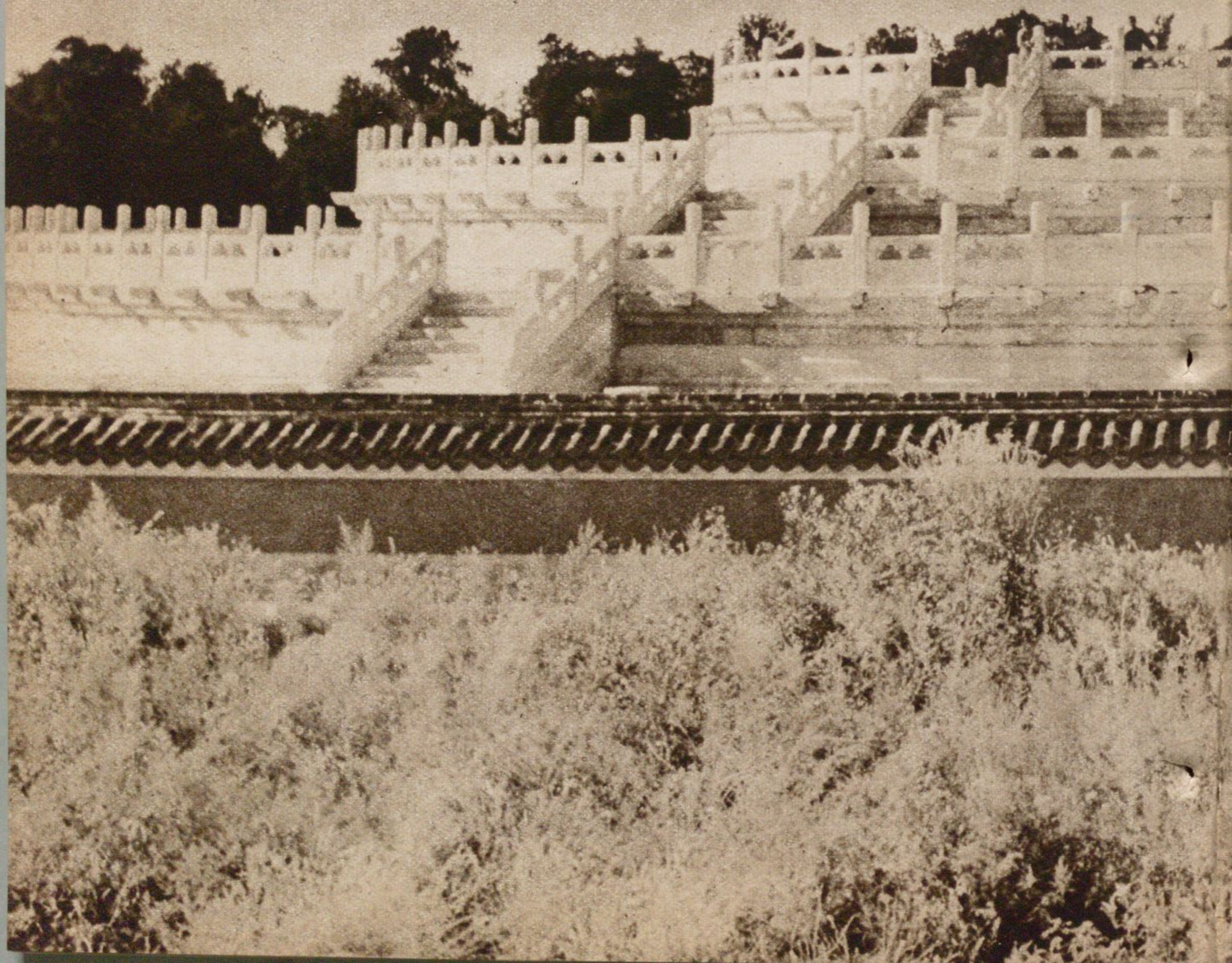
ここを出て柏林の間を東南に進めば、所謂天壇の主體である大理石造の圜丘に出る。明の嘉靖年間の築造で、天に象つて圓形、三段に築き上げ、下段の直徑一八二尺、高さ五尺四寸、中段の徑一三〇尺、高さ五尺四寸、上段の徑七八尺、高さ六尺二寸、眞白な大理石の巨板が天日に映發する眺めは異觀である。ここで、毎年冬至になると天子親ら天を祀られた。それは日出前七刻（一刻は十五分）に行はれるので壇下に庭燎をあげて暗を照した、今殘つてゐる鐵籠は即ち燎爐である

祈年殿

天壇・圜丘

TIEN TAN, THE TEMPLE OF HEAVEN, PEKING

天壇

圜丘の入口

圜丘南側にある燎爐

圜丘の北に碧琉璃瓦の圓殿あり、皇天上帝以下圜丘に移祀する諸神位を奉安するところ、之を皇穹宇といふ。この皇穹宇の東、樹林の間に宰牲亭、井亭神庫、祭器庫等の屋根が見えるが何れも風雨に委せて顧られない

さて皇穹宇を眞後に廻つて一直線に大石を疊み上げた道が三四町もあらうか左右の崖下は一面に古柏の密林、その向うに前記三段圓屋根の祈年殿が聳え立つてゐる

圜丘はひたすらな祭天の壇、祈年殿は萬民の爲に五穀豐穰を祈るところである

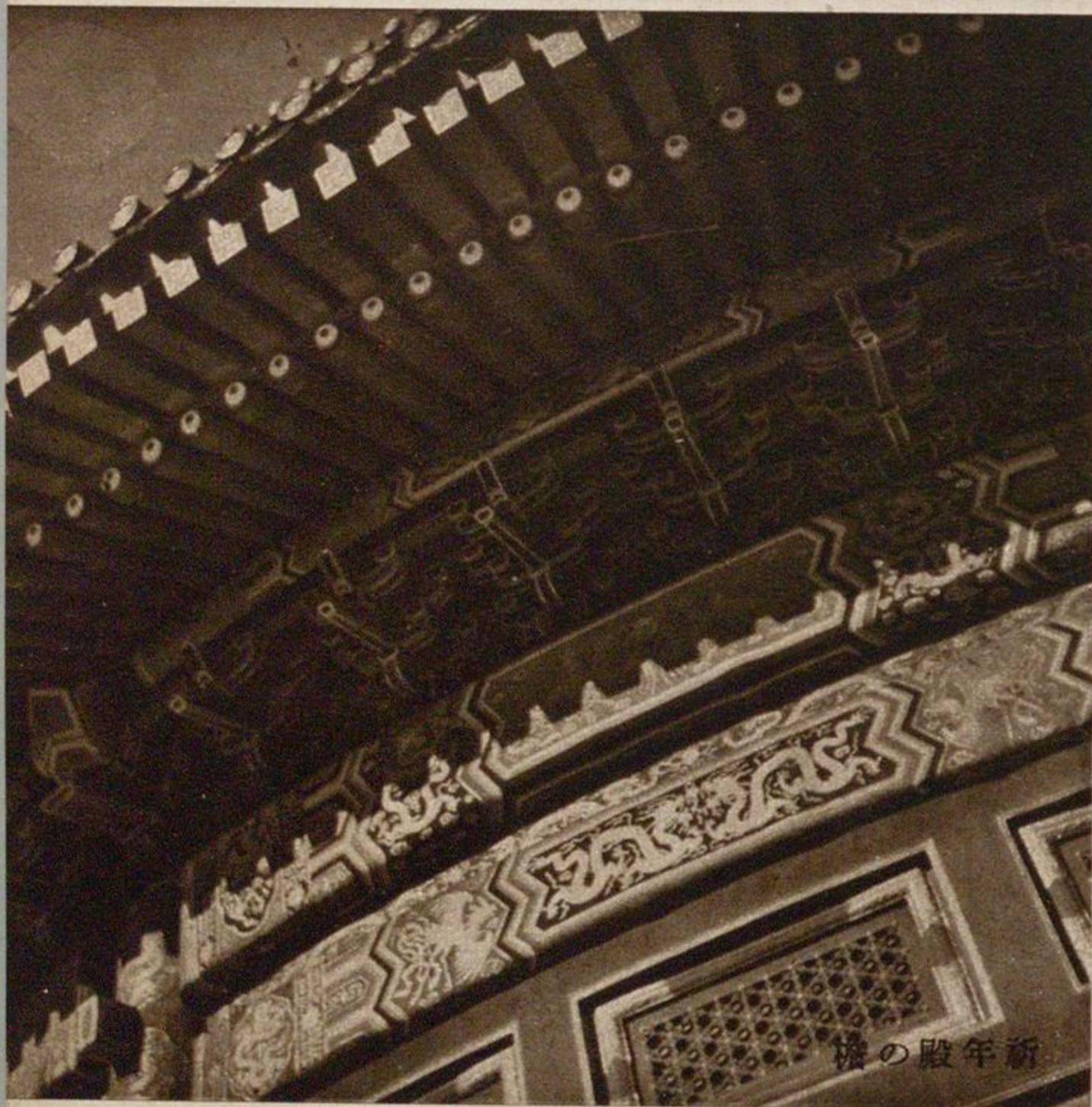
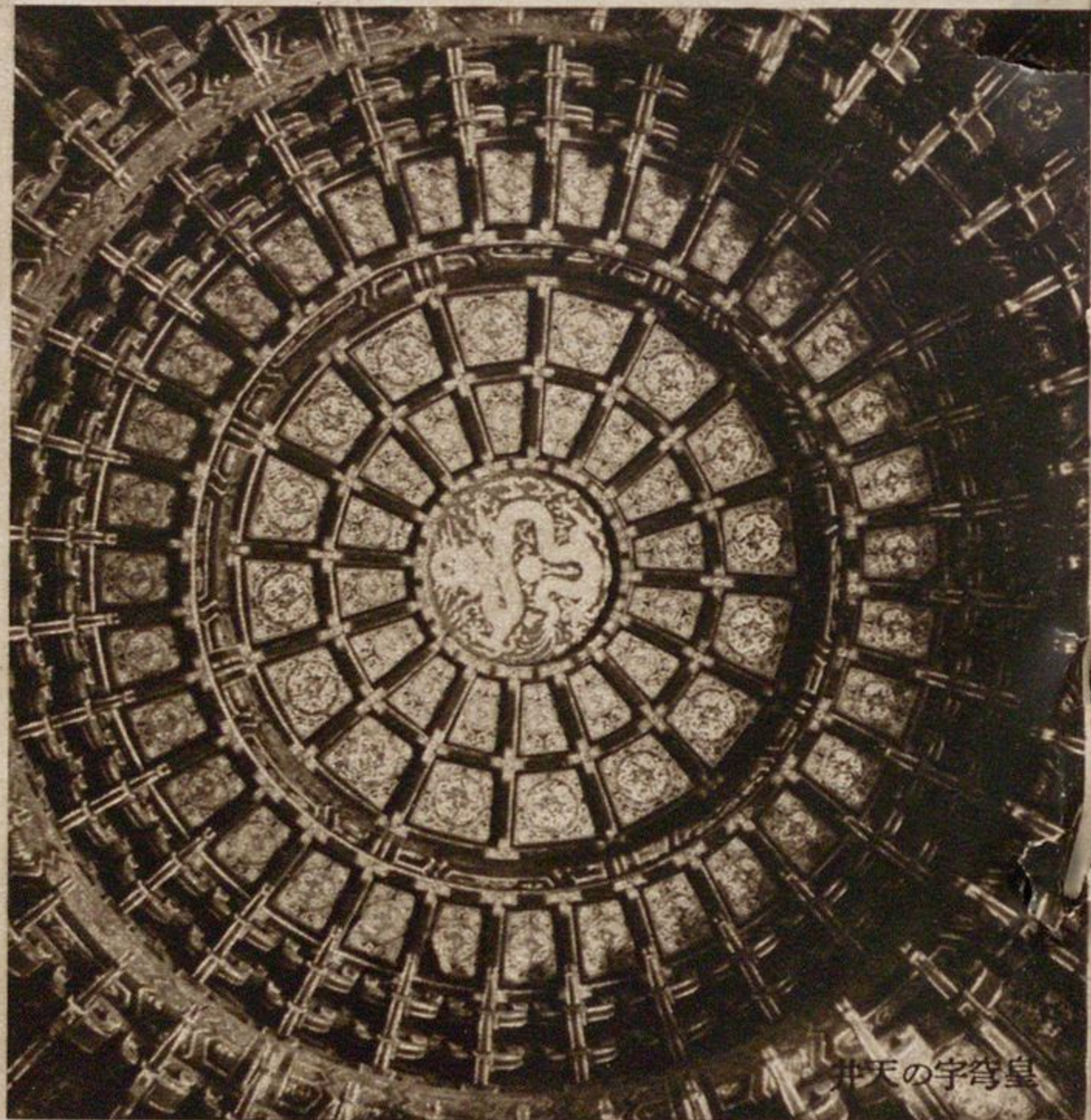
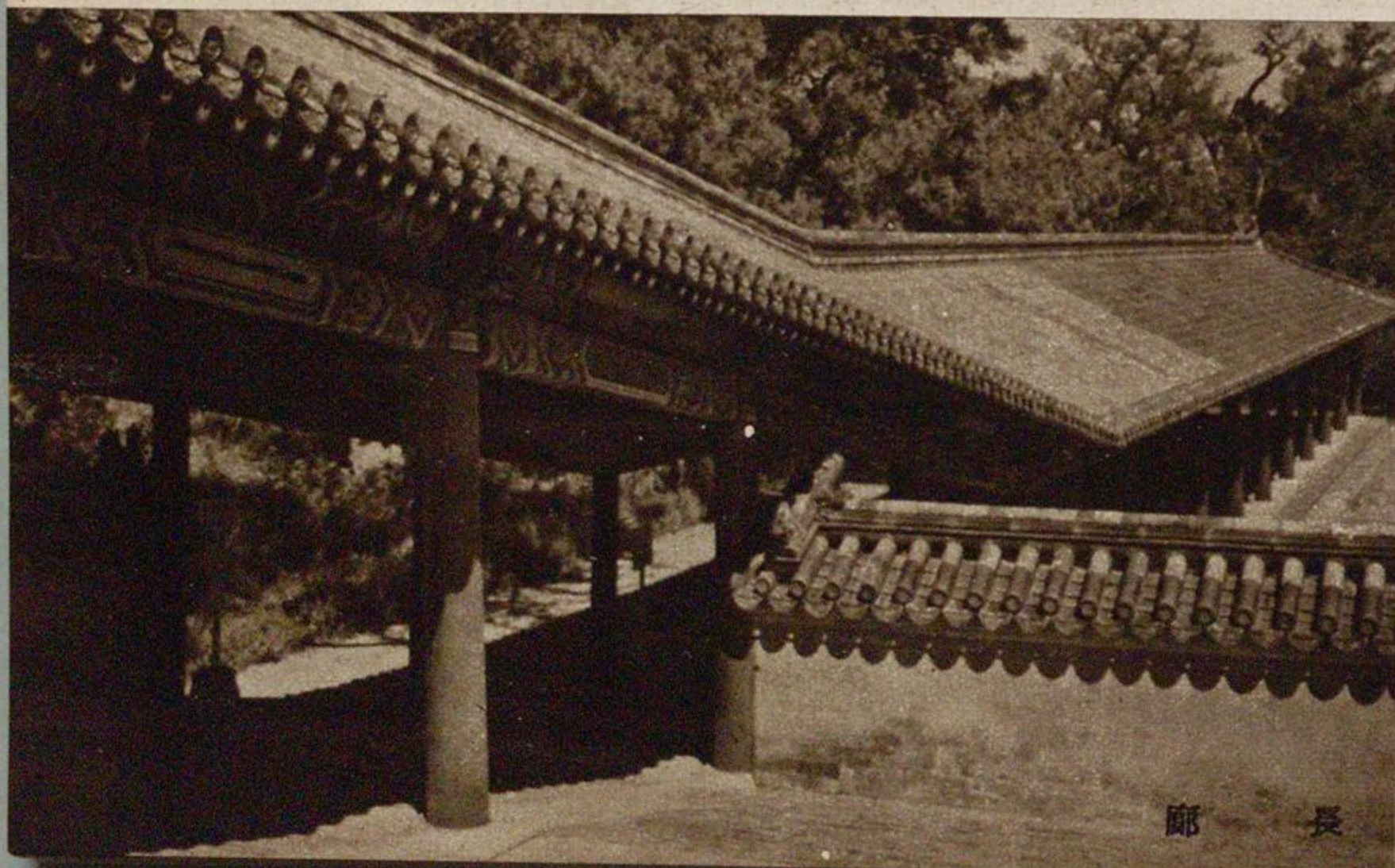
祭日は毎年正月上辛、この日後方皇乾殿に奉安された皇天上帝以下諸神位を

祈年殿の扉の彫刻

星石

祈年殿の檐

皇穹宇の天井

長廊

この殿内に移して祭られた
この圓殿はやはり大理石造三層の壇上に築かれてゐて、殿の直徑八〇尺、高さ九〇尺、圓頂の天を指す偉觀はちよつと形容し難い、たゞ不思議に天の高さを覺える
新年殿を下つて東門から長廊が續く。その途中南側に北斗七星が落ちたといふ巨岩——七星石があるけれども隕石ではない

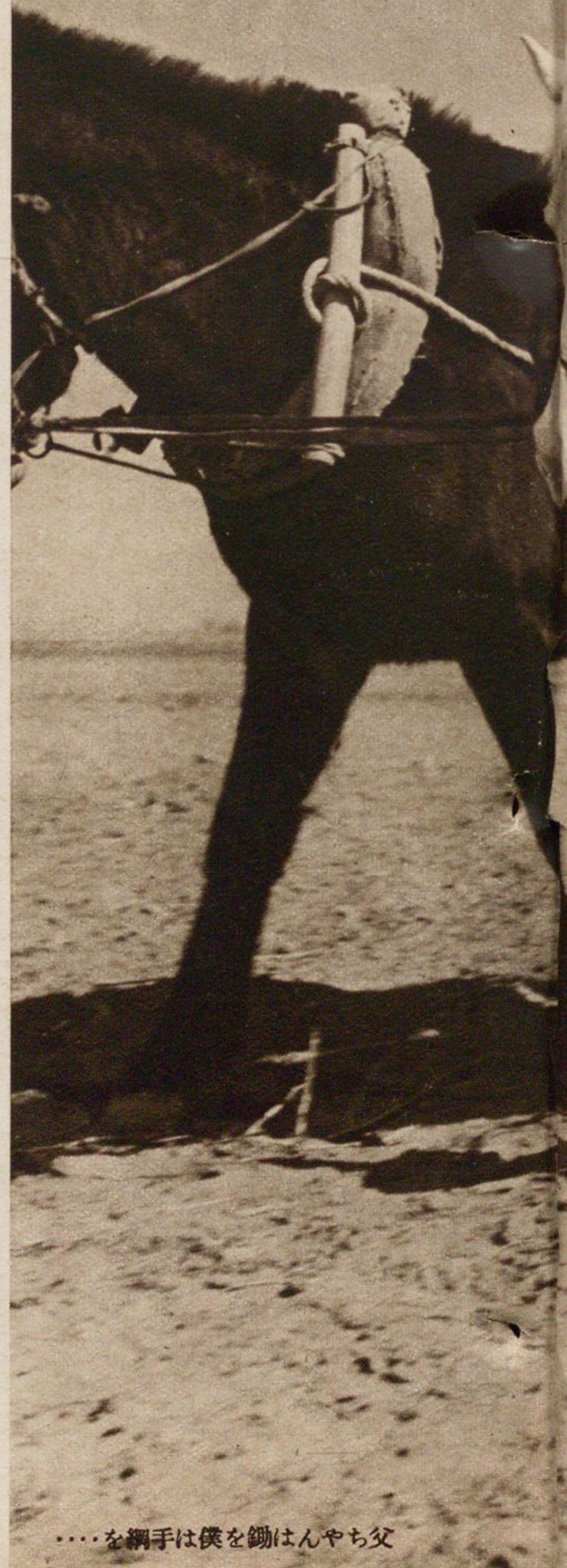
春耕

FARMARS ON A FARM

堆肥の撒布

棉の種子まき

畑に引く水の汲みあげ

父ちやんは鋤を僕は手綱を・・・・

春近き農家

正月の十五日―元宵節が過ぎると北支の農村には春が訪れる。膚を刺すやうな朔風がいつの間にか雪をとかす暖い風に變つてくると、大地は心よい香をたてる。日中、どこか風のあたらない陽だまりにでも居ると、なんとなくかぐはしい柳の

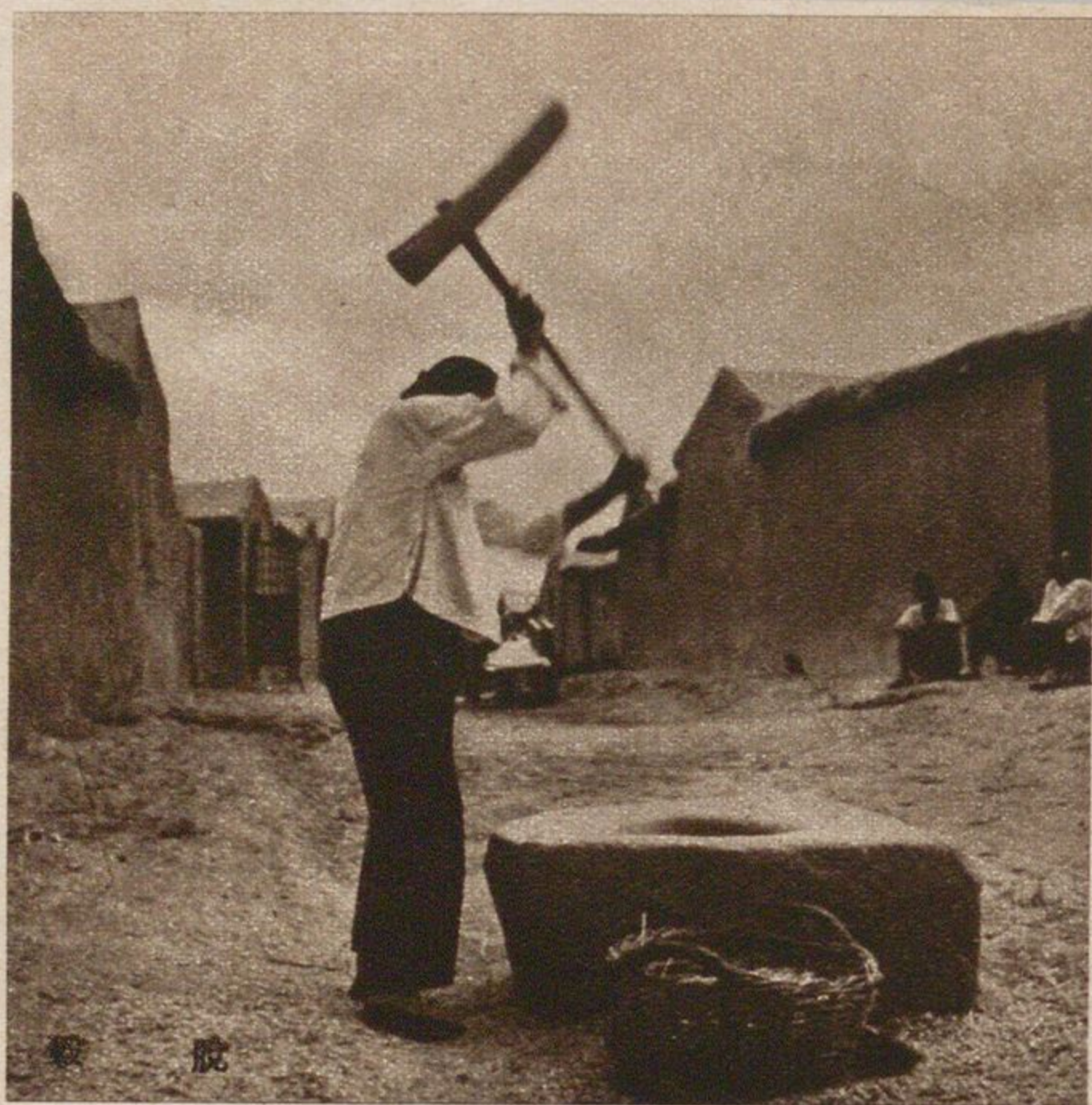
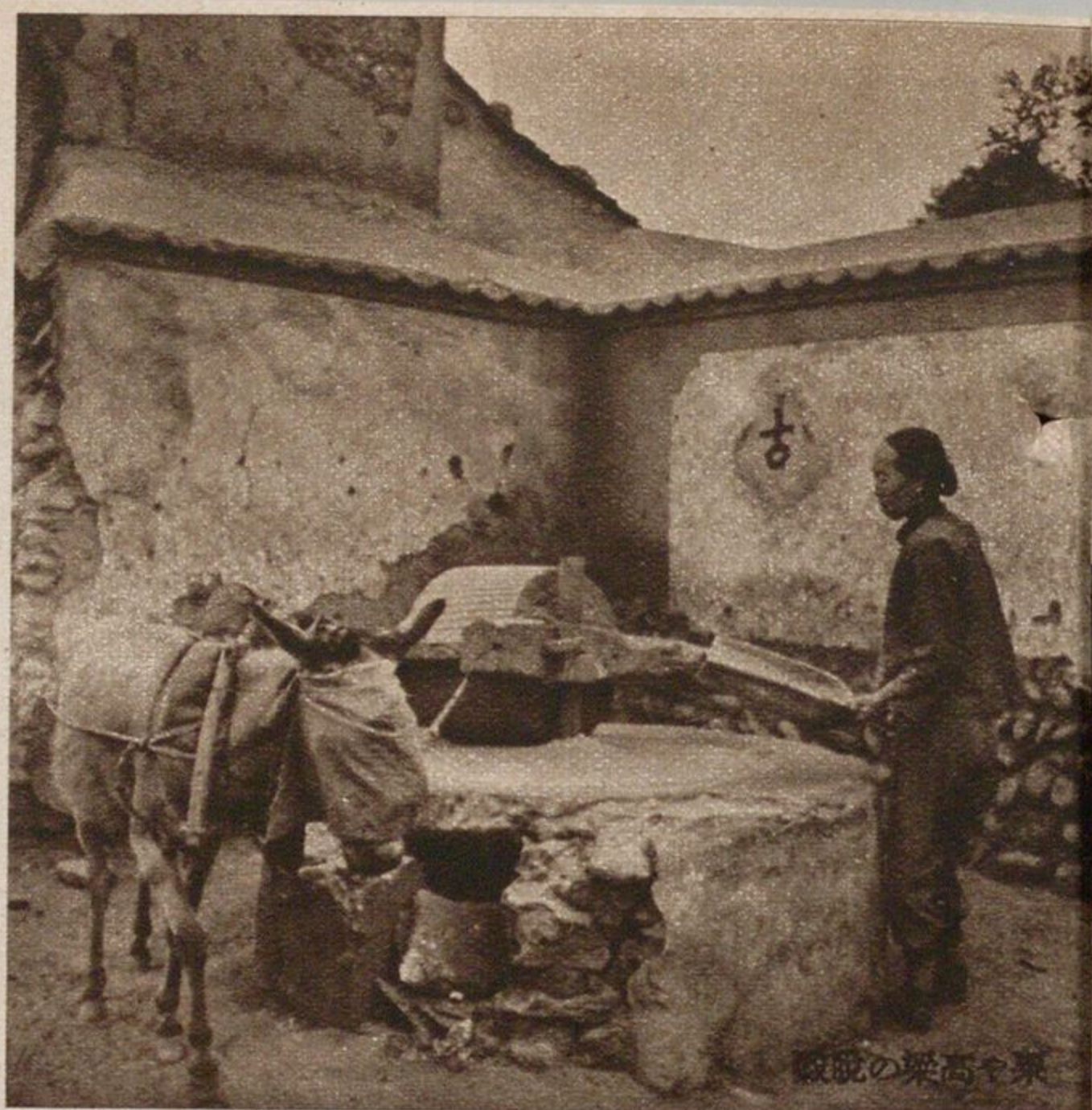
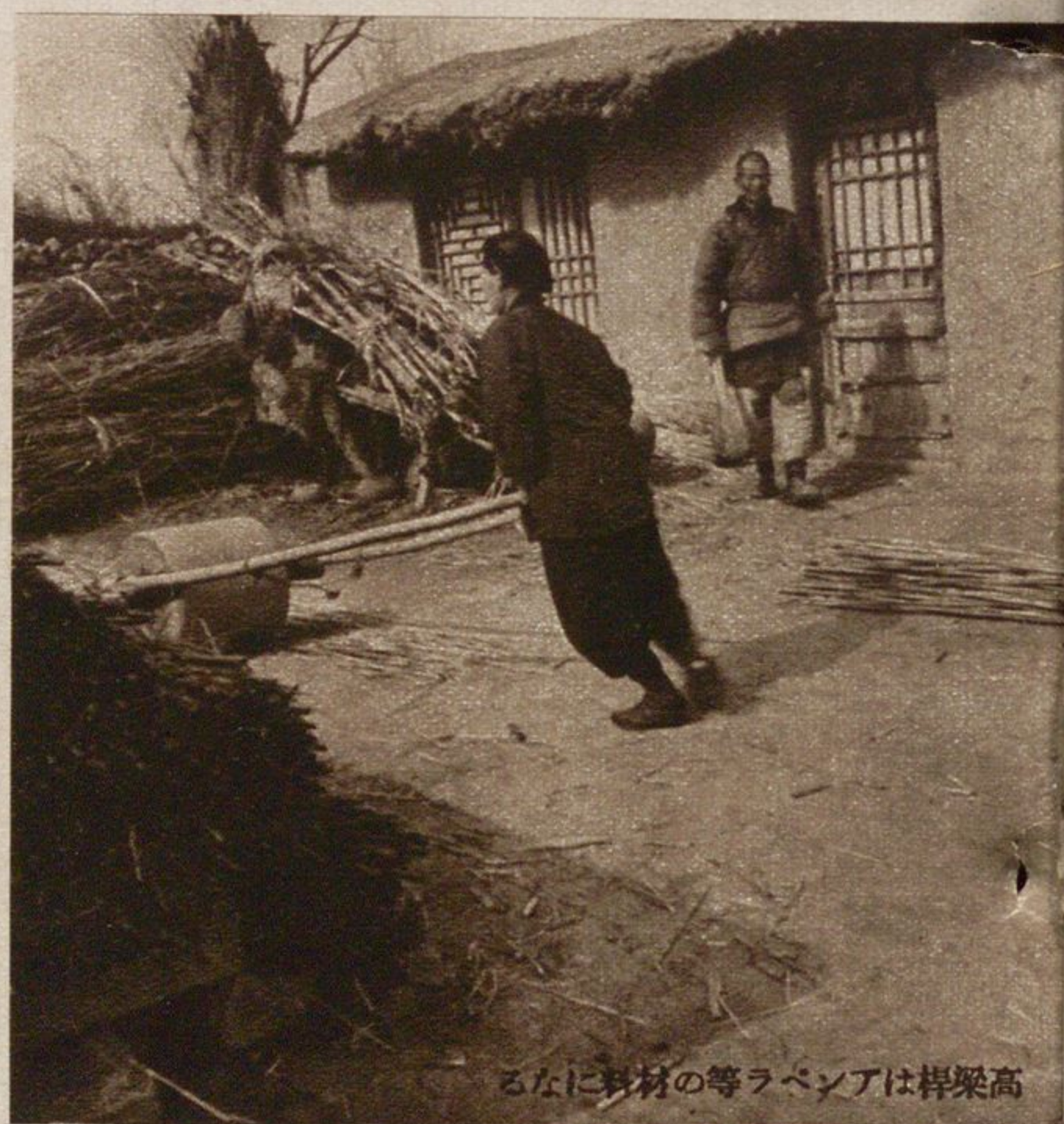
FARM-HOUSE IN EARLY SPRING

農家の庭さ

脱穀

粟を高粱の脱穀

昔ながらの器具で

高粱桿はアンペラ等の材料になる

芽の匂ひが感じられ――大地はとけた雪の淡い濕氣をふくみ、雪の下から朽葉の下から眼ざめてきた力づよい大地の息吹をつたへる。曠野の丘陵には蒲公英、なづな等が若々しい芽を吹き出し、淡紅色の桃の蕾が綻んで來る

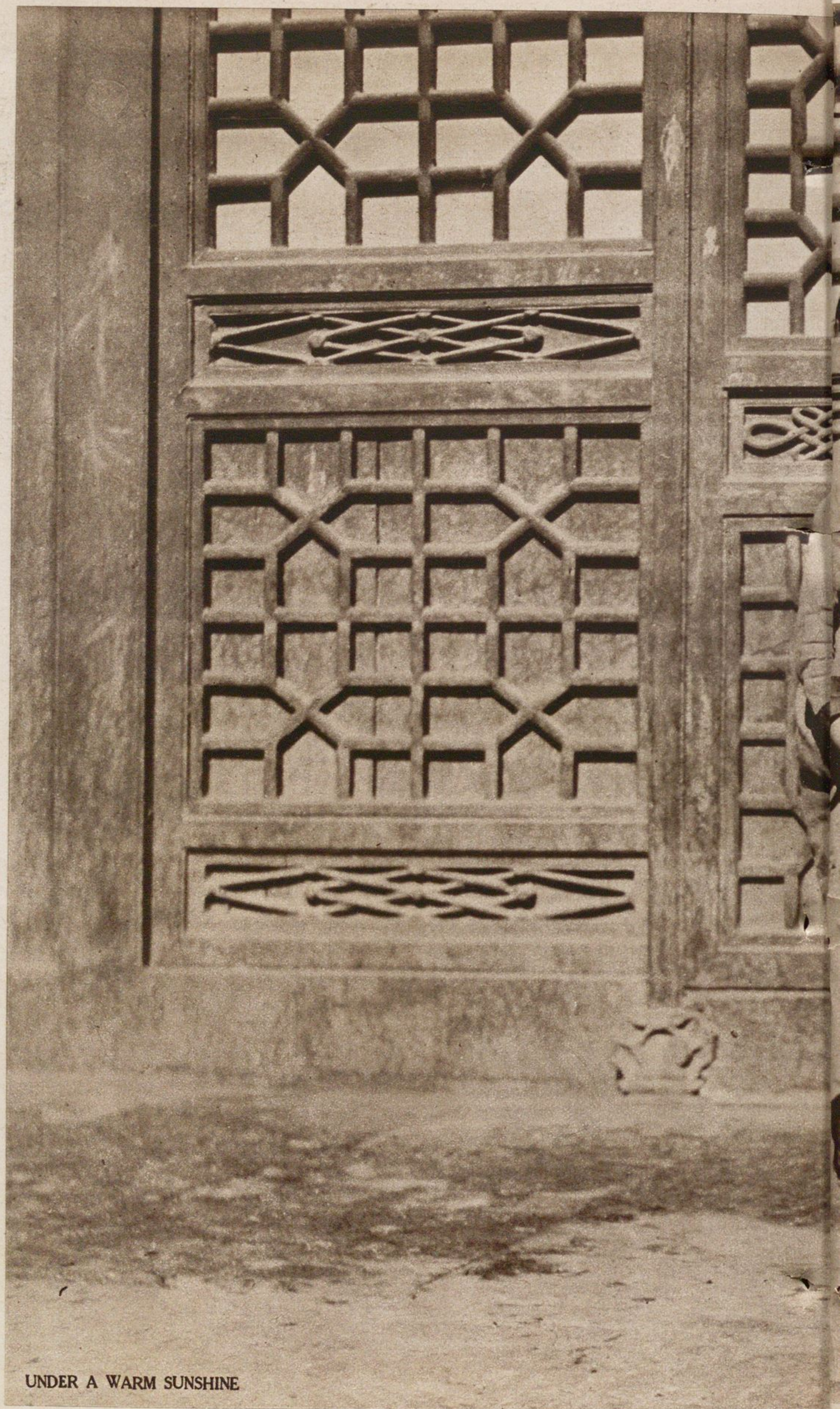
一年中で最も平和な季節は旱魃も洪水も襲つて來ない春である。娘々廟や觀音廟のお祭には町へ出て、玉蜀黍や高粱、棉の種子、鍬や耙の農具を買つてくる。彼等の胸には今年こそ、うんと働いて豚を買つて、牛を買つて、それから新しい豐かな畑を!! といろ〳〵樂しい希望が湧く

水仙の花　茉莉の香
妹が辨當持つて　野良に來た
兄さん　ことしは豐年よ
金の釵子(かんざし)こさへませう

こんな長閑な唄が子供の口から聞えて來るのもこの頃である

道ばたの地神の祠には、今年こそ災難がありませぬやうにとまごころこめた桃の花や野の花が供へられる

支那の中原を蛇のやうにのたうつ大黃河の氾濫、草根を掘り土を嚙つて飢を凌ぐ旱魃、無道な官僚と軍閥の搾取、蝗害、戰禍――思ひ出しても身震ひするやうな災難から、せめて今年だけでも、せめてその一つだけでも免れたいといふ切なる祈りである

踢毽兒

UNDER A WARM SUNSHINE

鹸灘と續く牛車の列

鹽を掬ふ

A SALT-LAKE IN MENGCHIANG

鹽湖（ダブス・ノール）

淺い水の底一面が純白の鹽の層になつてゐて、まるで岸邊の眞砂のやうにただ無雜作に掬ひ上げさへすれば、いくらでも鹽が採れる鹽湖……海水鹽だけしか知らぬ日本では想像し難いことだが、蒙疆から新疆にかけて、かやうな鹽湖が殆ど無數に散在してゐる。中でも有名なのはシリンゴール盟のダブスノールで南北六支里、東西十三支里に亙り、湖底は數尺の鹽層をなしてゐる。陰暦五月から九月迄の夏季には、この湖の周圍一帶に數千の蒙古包の聚落ができ、無數の牛車に賑ふ。そして鹽を滿載した牛車は數百臺の縱列をなして遙々京包沿線や熱河の林西方面に搬出して來るのであるが、千里眼を遮るもののなき内蒙の大草原に、天地を限る純白の一線をなしてゆたゆたと白蛇の如く行進する牛車隊の壯觀は、旅行者の脚を停めさせずにはおかない。この湖は北緯四十五度に在るが、眞冬にも凍結せず、また漢人や滿洲人の稼行は禁じられてゐるので四季を通じて蒙古人が採取してゐて年採取量は百五十萬貫を下るまいと見られてゐる

これらの湖鹽の外に天然曹達も隨處に産出する。共に未だ十分調査されてはゐないが化學工業鹽の不足に惱む日本にとつては鐵、石炭につぐ重要資源であり、將來の爲の寶庫である

紅事

何の氣なしに北京に踏込んだ旅行者でも、思ひがけなく仰山らしいケバケバした行列に出過すことがあるに違ひない。それは婚禮の行列か葬列で、何れも樂隊がついてゐるので迂濶に見たらどちらか判別がつかぬ位であるが、婚禮はすべて紅を基本色に、葬禮は白が基本色になつてゐる。故に慶事を紅事(ホンシー)、不幸があれば白事(パイシー)と謂ふ

さて婚禮の樣式におよそ漢禮、旗禮、回々禮の三つあり、漢禮を更に北京禮と南禮に區別されるが、回々禮を除けばおほむね大同小異と見てよい。ところで行列が示すやうに、婚と葬は人生の二大事として面子にかけた入費をかける習慣があるので、男一匹婚費を稼ぎたい一心に半生を殆んど守錢奴みたいな生活に沒頭する者もある。

結婚迄の順序は——まづ一定の媒酌人が雙方の兩親間に奔走して諒解を得たら八字帖(生年月日家系書)を交換する。次に相看(シアンカン)(見合)と云つても親達だけで、本人同志は本式迄顏も知らんのである。相看がすんで嫁方へ放定(ファンティン)(結納)が贈られたら婚約成立だ。やがて過(クオ)禮(リー)と云つて結納全部を納めたら愈々吉日を擇んで擧式——と云ふことで、いかにも簡單な樣であるがその邊の細かな記述はとても僅かな紙面では盡されず、煩雜極まる形式や奇習が多い。最近は一部インテリ階級の間には新式結婚が漸く盛行しつつあるが、基督教式の形式だけをまね糟粕だけをなめたものが多い

新郎新婦の正装(旗人)

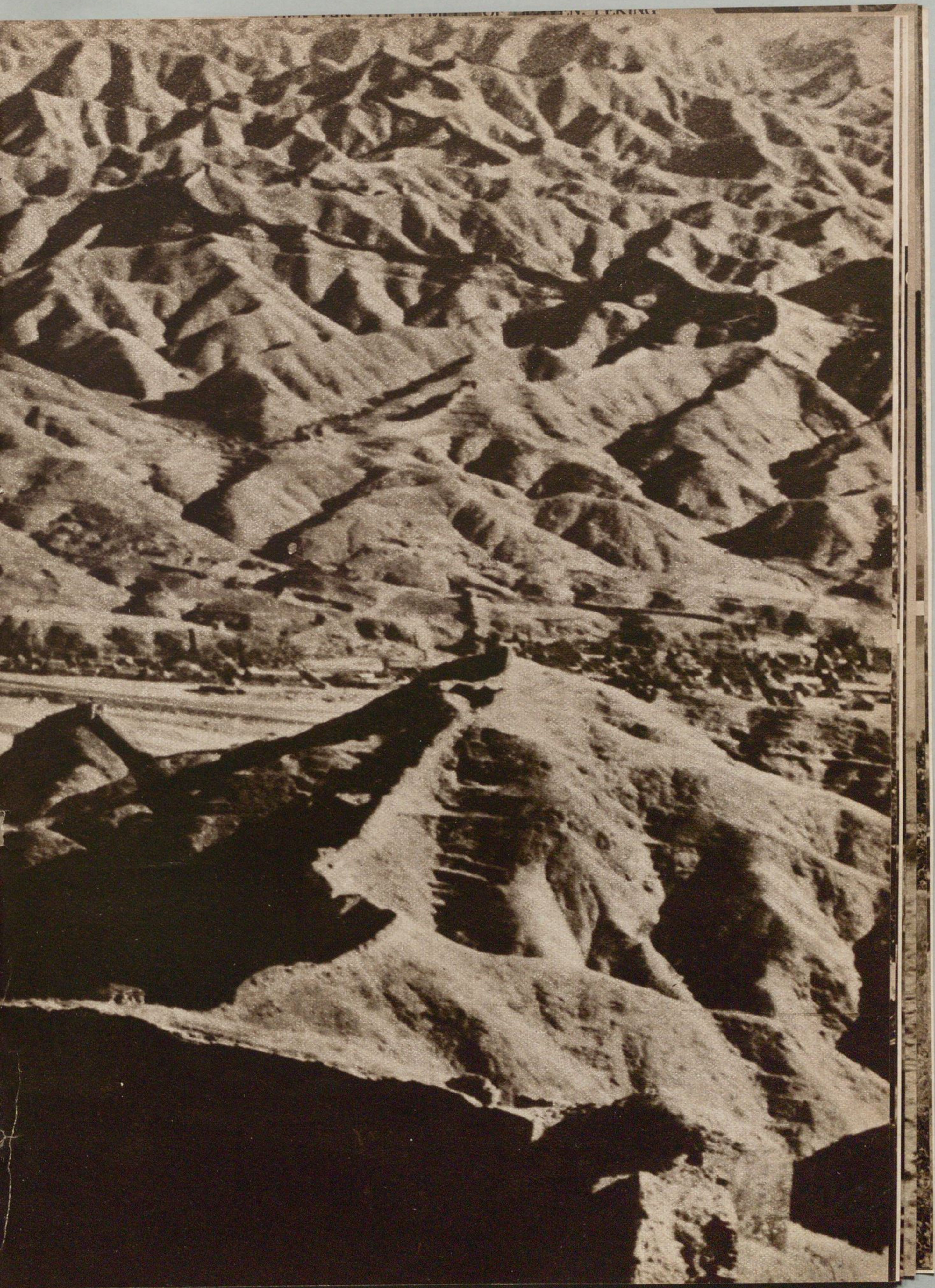
花嫁の轎

A CHINESE WEDDING PROCESSION

花嫁行列

都大路を練り歩く花嫁の轎

行列の先頭を行く樂隊

近代的な花嫁自動車

古北口
A BIRDS EYE VIEW OF KU-PEI-KOU

雄大な黄土の河岸

黄河と包頭

黄河は支那の西北角、青海省の西南にあるパエンコラ山脈の小さい盆地から流れて、渤海にそゝぐ。河口まで全長實に四千キロ。流域は人口一億、北支那六省を包括して九十萬方キロ四千キロと一口にいふが青森から本州を縱斷して下關に出、朝鮮海峽を渡つて半島を北上し、安東、奉天、山海關と、滿洲國を東西に橫斷、さらに南下して北支の首都北京に達する大距離である

塞外の一都市包頭は奥地と北京天津地方を結ぶ物資の中繼集散市場であり、かつては「小上海」と稱せられた。それは黄河と京包線（北京—包頭間八一七キロ）の交叉する要地を占めてゐるからに他ならない

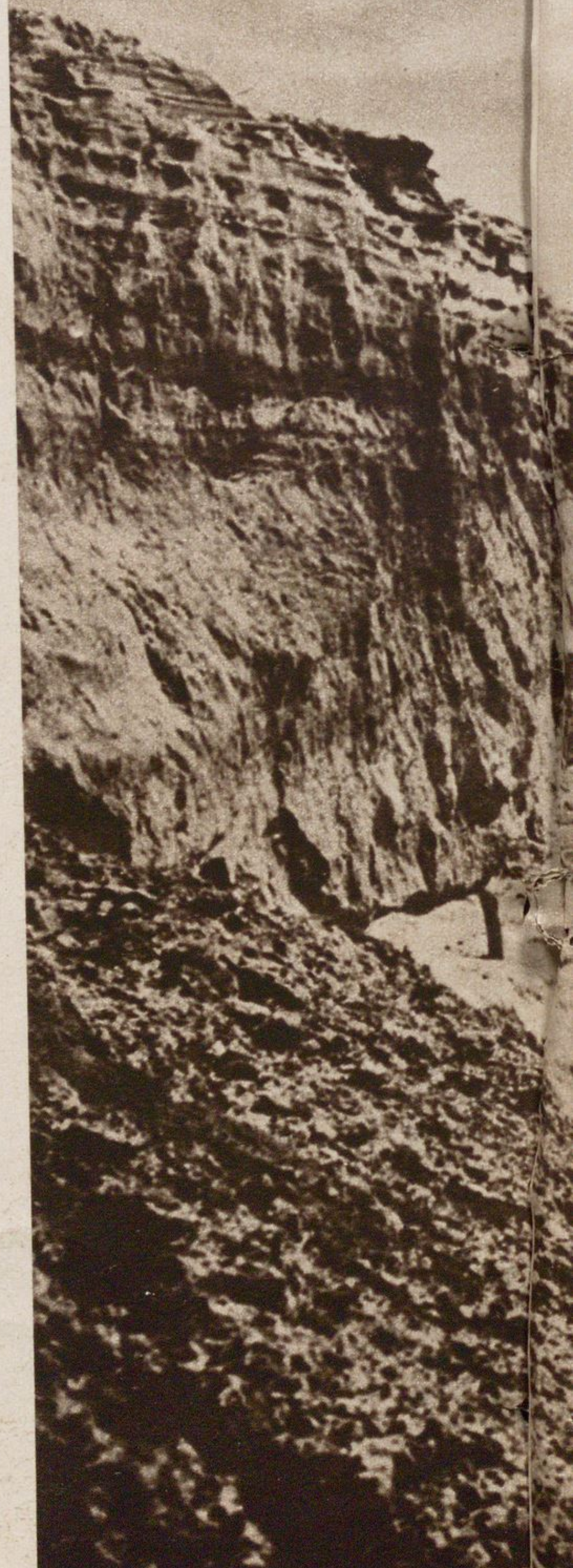
一般に蒙疆の貿易は地域的に大きく二つに分たれてゐる。一つは張家口を中心とするもので「蒙古貿易」と呼ばれ、一つは包頭を中心とするもので「西北貿易」と稱される

「蒙古貿易」は張家口が嘗て京津の大市場と、內外蒙古、甘肅、寧夏、青海、新疆などいはゆる西北方面とをつなぐ大中繼市場として殷盛を極めたが、外蒙の獨立によるクーロン方面との隊商交易の杜絕、京包線の開通による背後地の西漸などによつて漸次衰勢を辿つて今日に及んだ

これに反して「西北貿易」は黄河水運に惠まれて依然蒙疆有數の市場として將來を重視されてゐる。現在は治安の關係上西北との交通は中絕の有樣であるが、所謂西北貿易振興策が具體的に實施された曉、交易額は一年三千萬圓程度に上る。この具體策の實施は經濟的の重要意義はもちろん、西北赤色ルート建設に狂奔するソヴイエート政權に對する大きな政治的意義を有することを見落してはならない。また包頭の有する政治、經濟、軍事、文化的意義が一層強く大きくなることは必然であらう

市街は淸朝の乾隆年間（約二百年前）から漢人の移住者が激增して今日に至つた、現在人口約七萬、邦人一千名を超えてゐる。中繼市場として發展した都市だけに產業的には見るべきものがなく、毛織、毛毯、搾油、製紙などの手工業のほかに小規模な製粉工場があるのみである。目下經濟的には沈滯してをり西北貿易恢復の成否が包頭の死活を左右するものと注目されてゐる

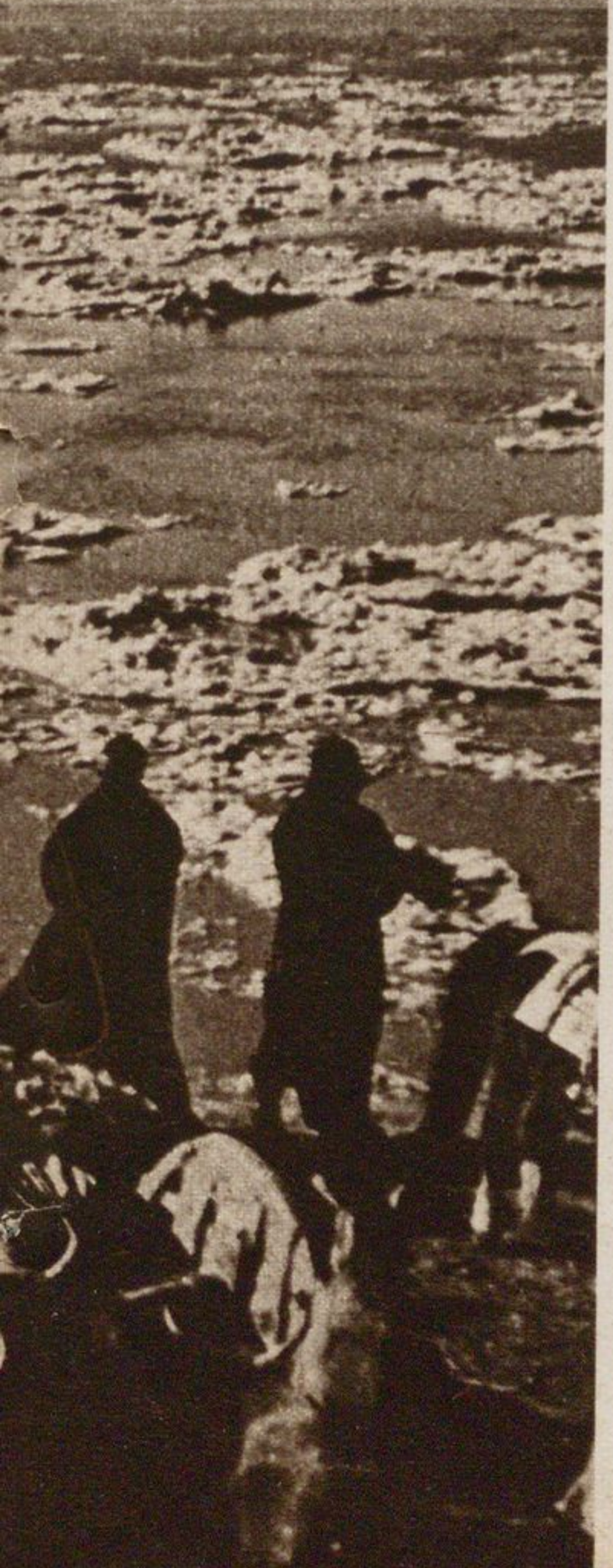
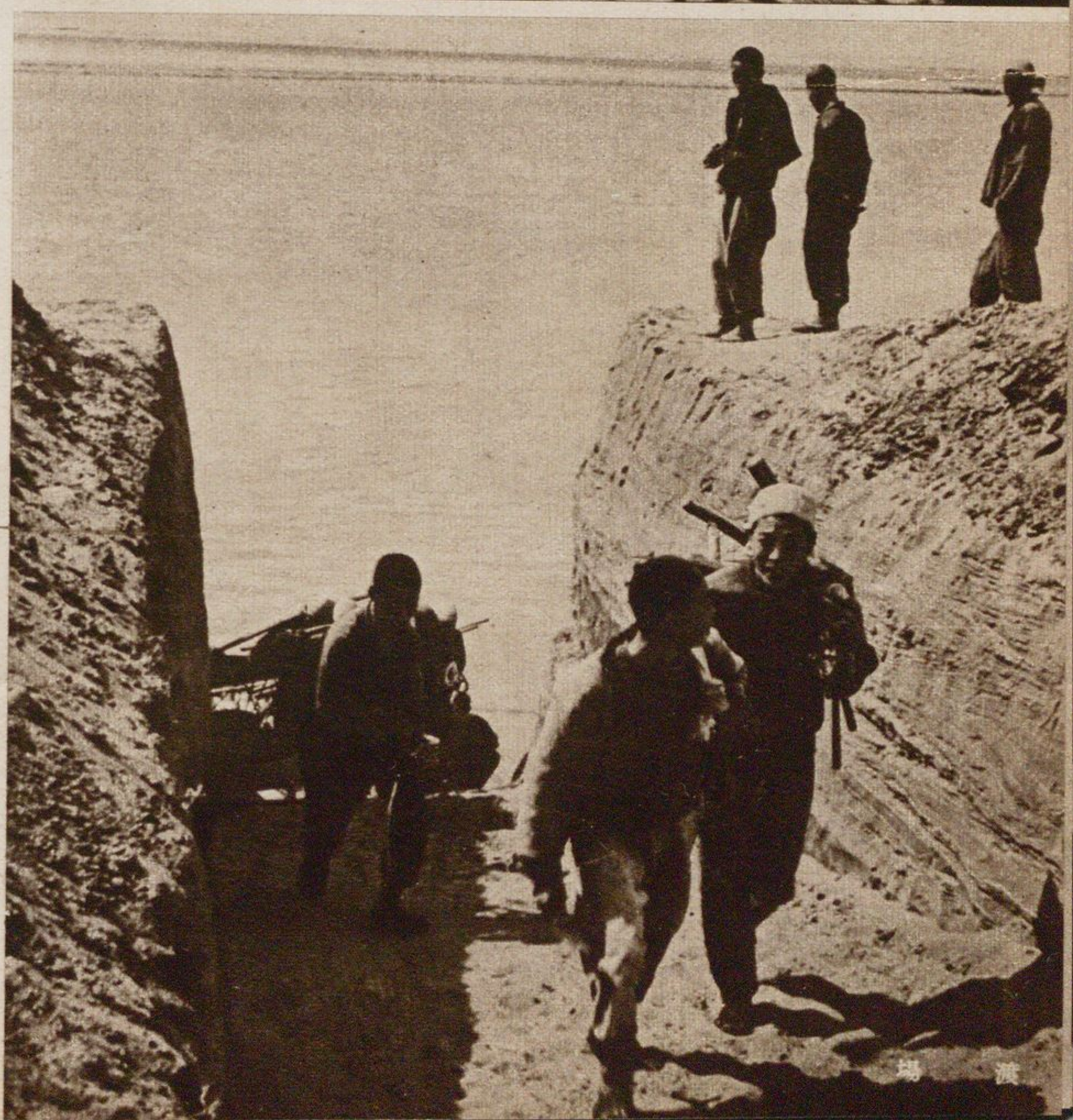
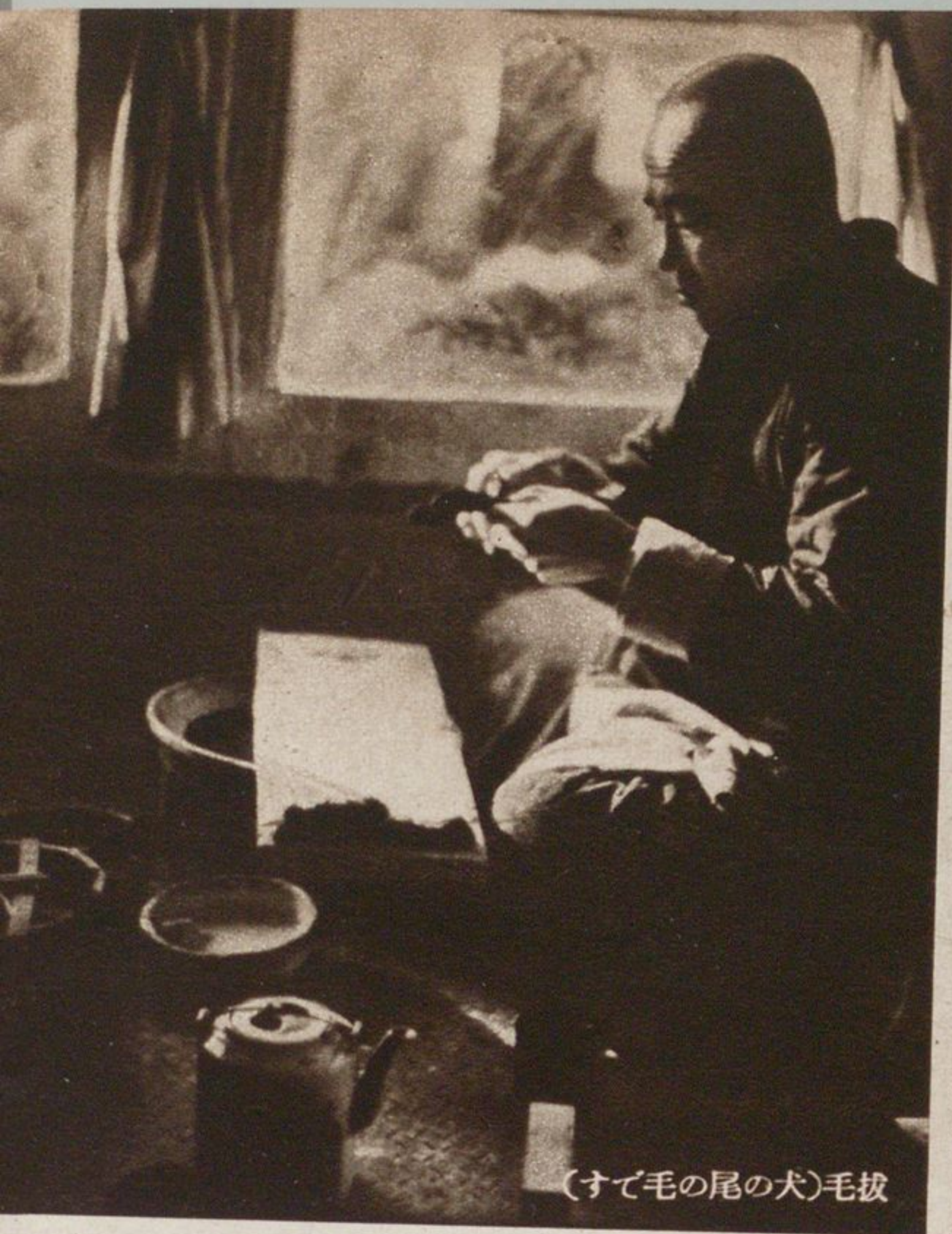
集散物資の主なるものは牛皮、羊皮、羊毛、らくだ毛、雜穀、甘草、麻、枸杞、アヘン、鹽、天然曹達などで綿糸、綿布、諸雜貨、石油、磚茶などを移出する

包頭の名の出た由來は一說に蒙古語で「土地相會ス」の意と言はれるが、事實黄河の水運のみならず陸運に於ても內蒙交通上に扇の要の如き中樞部に位置して各地に公路を出してゐることも記憶さるべきである

羊毛の積出し

渡場

天然曹達地帶

解氷——對岸は水田適地として注目される河套地區

拔毛（犬の尾の毛です）

毛筆製造

支那はさすが文字の國だけに、小學兒童や飯館の番頭たちでも吃驚するやうな巧い字を書く。今日もなほ、役所や學校ですらペンや鉛筆を使ふことは尠く、商店その他殆ど毛筆を使つてゐる。それだけに支那ではなか〳〵立派な毛筆が出來、日本にも輸出されてゐる

支那での毛筆の始りは、今を去る二千百年前、秦の始皇帝の頃匈奴を伐ち萬里の長城を鎮守した名將蒙恬が、書信の不便なのを痛感してこれを發明したといはれてゐる。のち後漢の和帝の頃（一千九百五十年前）に至つて蔡倫による紙の發明、三國の魏朝（一千七百年前）に韋誕の墨の發明でます〳〵重寶がられ、旺んに製造されるやうになつた。特に明、清朝の文化興隆期が最もさかんで、著名な製筆業者も多數輩出した

現在支那に於ける製筆業は湖筆歙墨の稱ある如く、湖州善璉鎭の出産が最も多くまた良質で、各地店頭に陳列されてゐる筆は大體この南方産である。支那各地の産額は年約二十五萬圓から三十萬圓位といはれ、羊や鷄、兎、犬などの毛が最もよく使はれてゐる。製法はほゞ日本と變るところはない

北京の製筆は年産二十萬本、約三萬圓位、支那第二といはれてゐるが、業者は僅に數軒で、ほかは筆の販賣店が餘暇に造る位のもの。北京で出來る筆は水筆といひ、犬や羊の尾の毛

BRUSHMAKERS AT WORK

檢査

刻字

毛を梳いて揃へる

作業場の内部

が主な材料になつてゐる

路　鐵

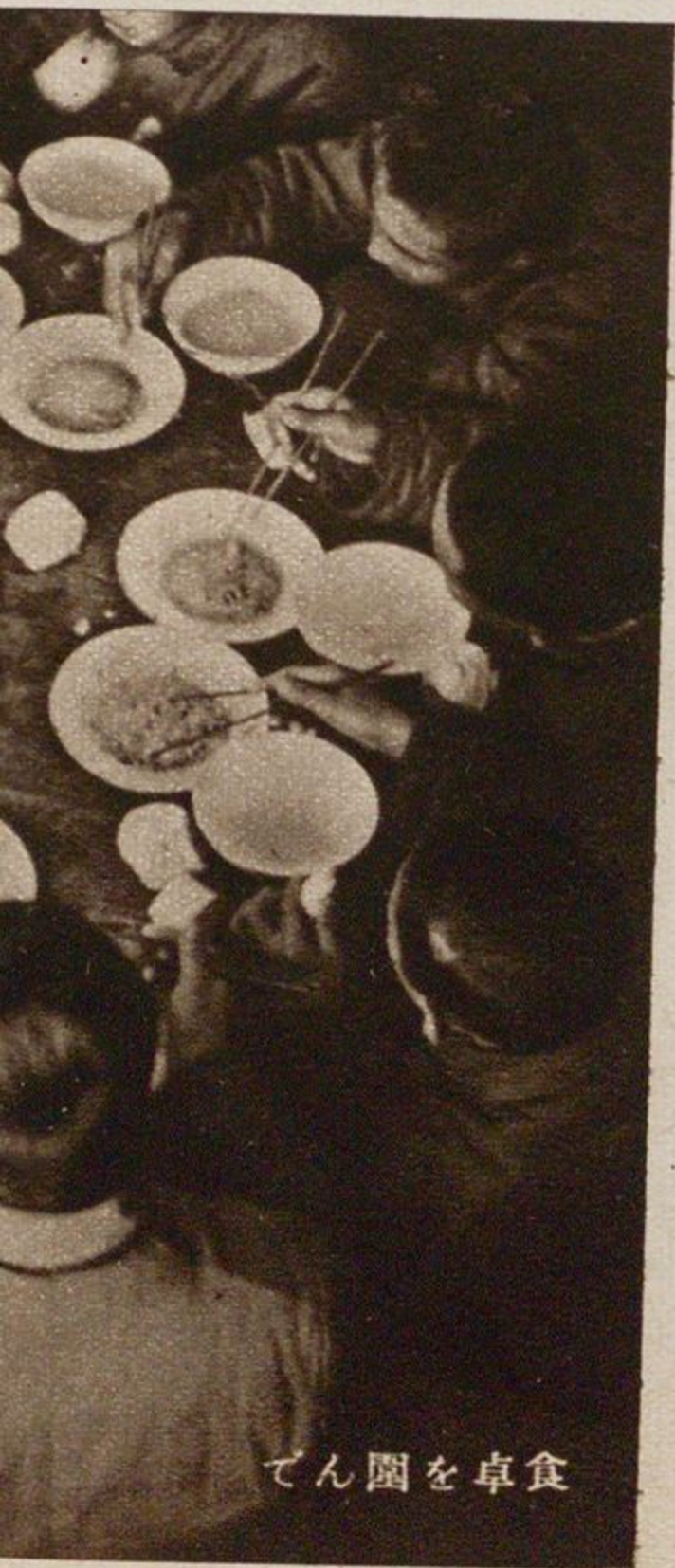
華北交通會社では從業員子弟の爲に扶輪學校を北支全線各地に設置してゐるがその他に鐵道、自動車從業員養成の爲に鐵路學院と中央鐵路學院を經營してゐる

鐵路學院は北京、天津、張家口、濟南、

管内の從業員の養成にあたつてゐる。普通科と速成科とに別れてゐて普通科は十五歳から二十歳迄の會社社員の中から試驗をして採用し修業年限は一ケ年半、速成科は主として中國人であつ

食卓を圍んで

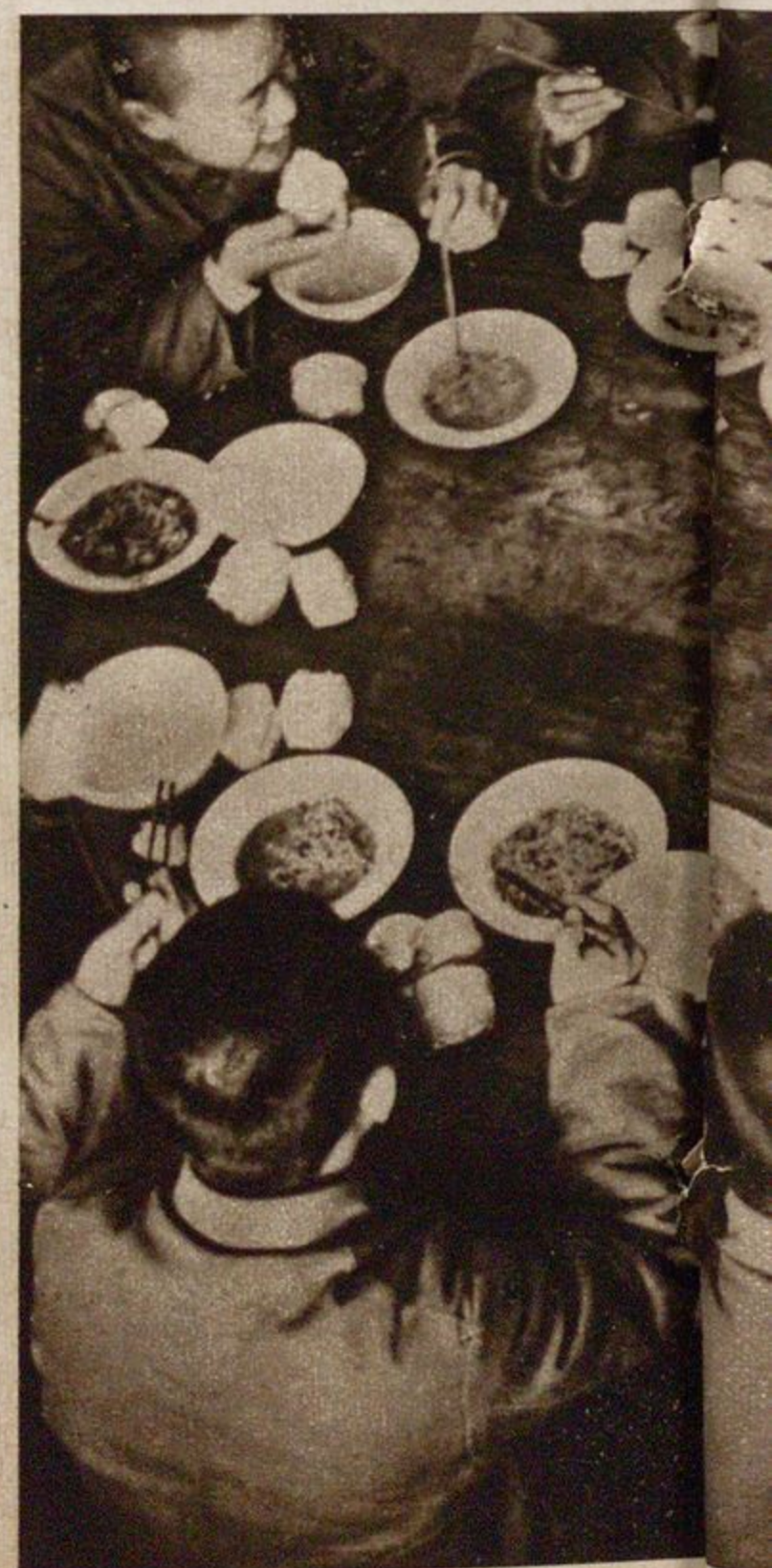
出發前の整列——自動車科生徒

學院

鐵路學院は北京、天津、張家口、濟南、中央鐵路學院は北京にあり、社業全般に關して日支從業員の養成に當つてゐる。鐵路學院卒業生、又は年齢二十六歳以下の優秀社員の中から選拔入學させてゐる。科は多數に分れ修業年限も科によつてそれ〲違ふが交通に關する專門的知識とあらゆる技術を與へ將

て日本語の習得に力を入れてゐる。期來の中堅社員を作る最高學府である。生徒は全部附屬の寄宿舍に入れられ良き自治制の下に生活してゐる

教室からひびく電信機を打つ音、日本語讀本を讀む聲、校庭の元氣な敎練、俱に大陸に於ける將來の理想的交通戰士を偲ばせてたのもしい

イキの音も輕く腕を磨く電信科生

トラツクで實習へ

街の藝人

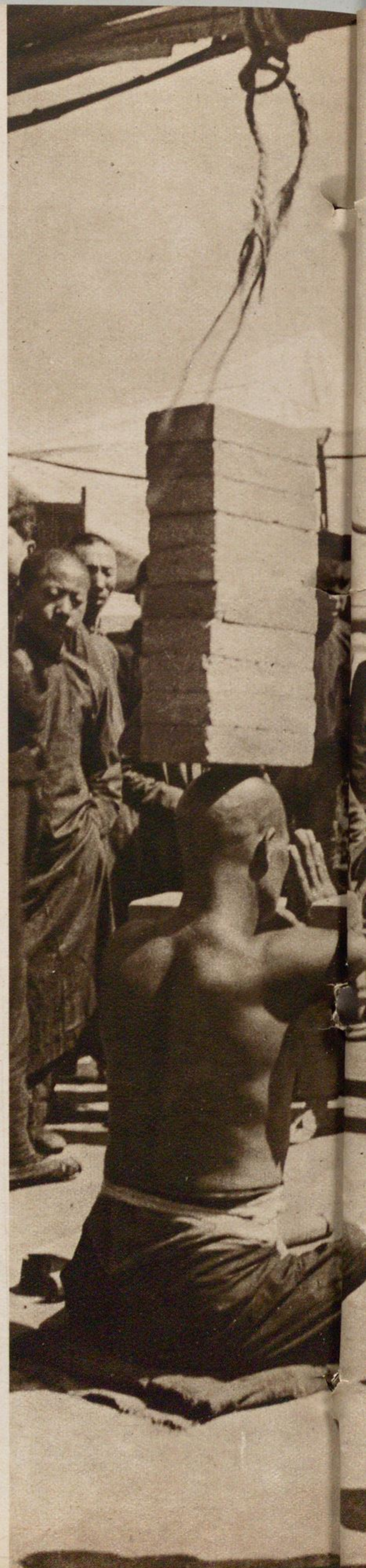
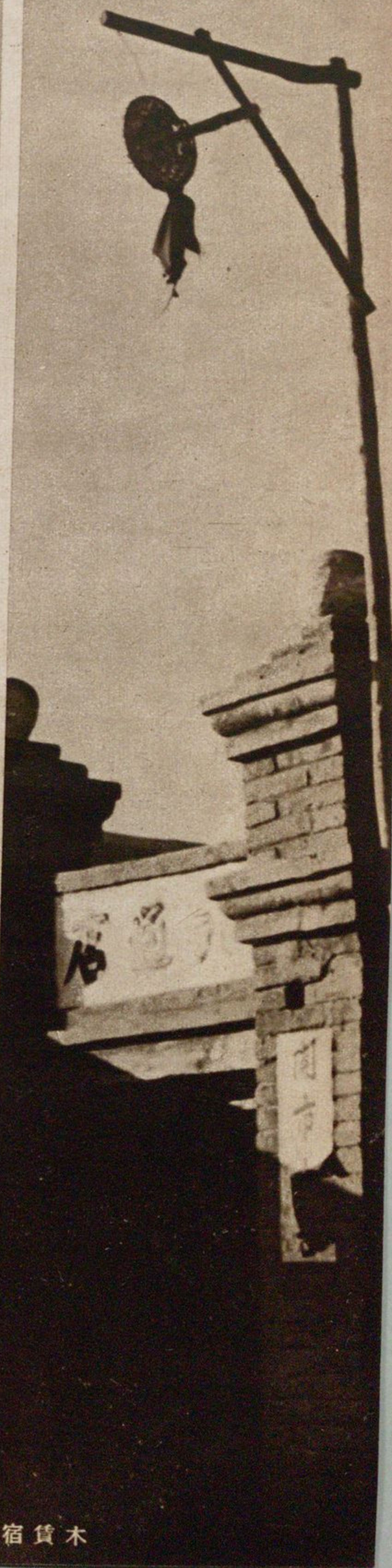
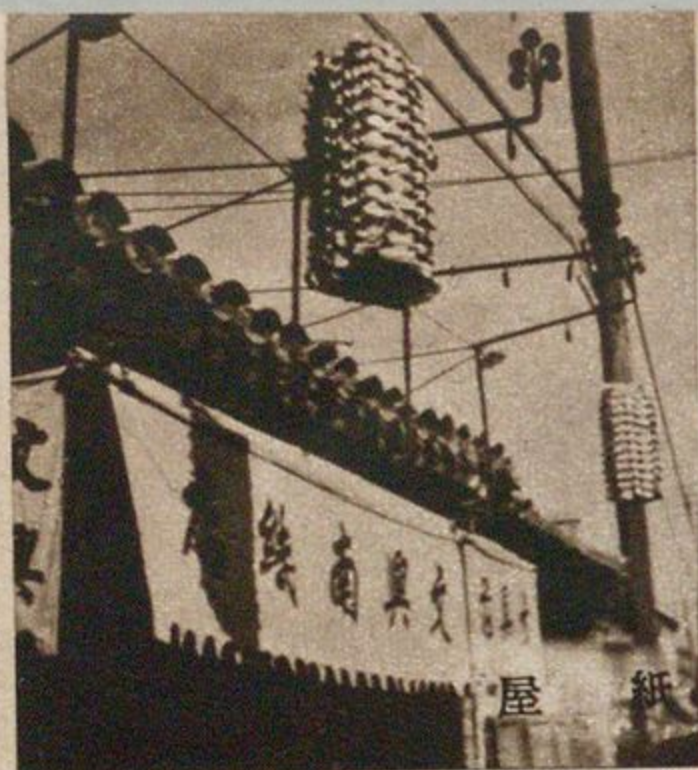
（下） 刀を呑んだり、槍をふりまはしたりするおなじみの曲藝師。支那語では變戯法と言ふ。戯は芝居の意で戯館（劇場）とか、聽戯（觀劇、支那の芝居はオペラ風に歌が主となつてゐるので、觀ると言はずに聽くと言ふ）などの言葉がある。曲藝とは言へさす手引く手が型にはまつたなか／＼大仰な所作事入りなので、變戯と言ふところなどさすがに文字の國である

……◇……

（中） 支那人は乞食を善丐（丐は乞食の意）と惡丐の二通りに分ける。善丐は「右や左の旦那さま」とたゞ憐みを乞ふ者、惡丐とは憐みを乞ふのにてを用ひる者で圖は惡丐の一種。頭と腕に石を載つけてもつともらしい合掌だがそのうちに石を頭にぶつつけて額から血を流しながら「一錢お惠みを」とやるのである。見てゐてまことにすさまじい。惡丐には刀で自分の脚を切るやうなのもゐる

……◇……

（左） 街頭サーカス、子供の逆立ち。逆立ちを支那語で拿大鼎と言ふ。大鼎をぶら下げるの意である。兄貴が弟にぶら下げられて目を白黒の態。もとで要らずの好い商賣だが弟が兄貴の頭を押さへて土足の逆立ち。あれも人の子と同情されるのも弟のほうで兄貴は損な役割だ。所詮「世は逆まの竹の杖」である

ACROBATIC STUNTS IN PEKING

CHINESE SIGN BOARDS

招牌

ブリキ細工屋

葬儀屋

木賃宿

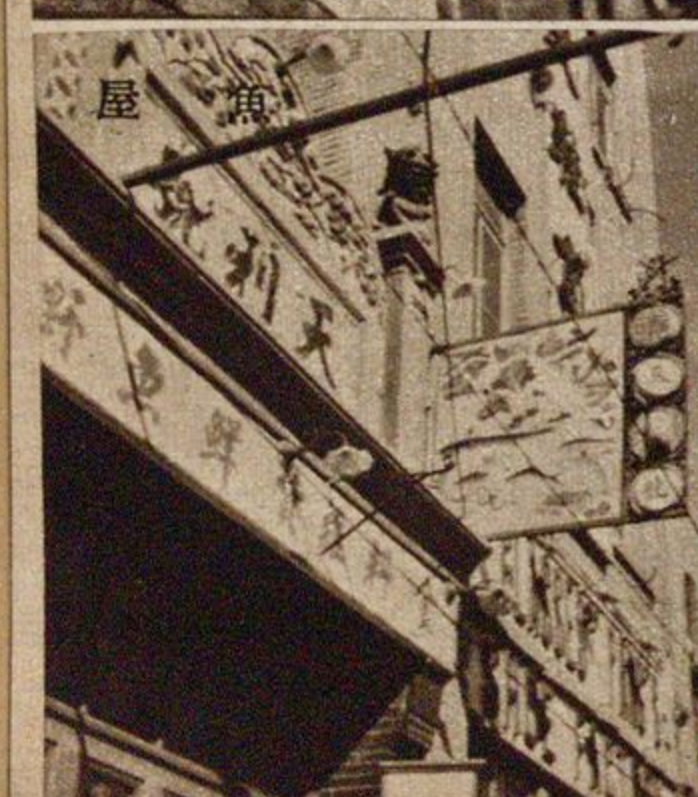
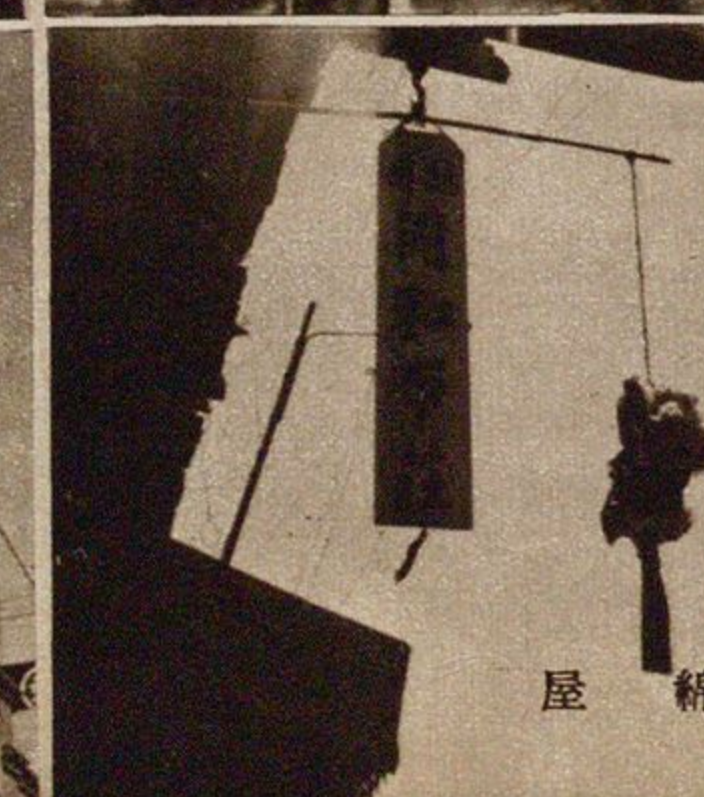
紙屋　提燈屋　表具屋　鏡屋

扇子屋　豆腐屋　帽子屋　篩屋

樂器屋（支那樂器專門）　かもじ屋　藥屋　凧屋

金物屋　小飲食店　煙管屋　ドン屋

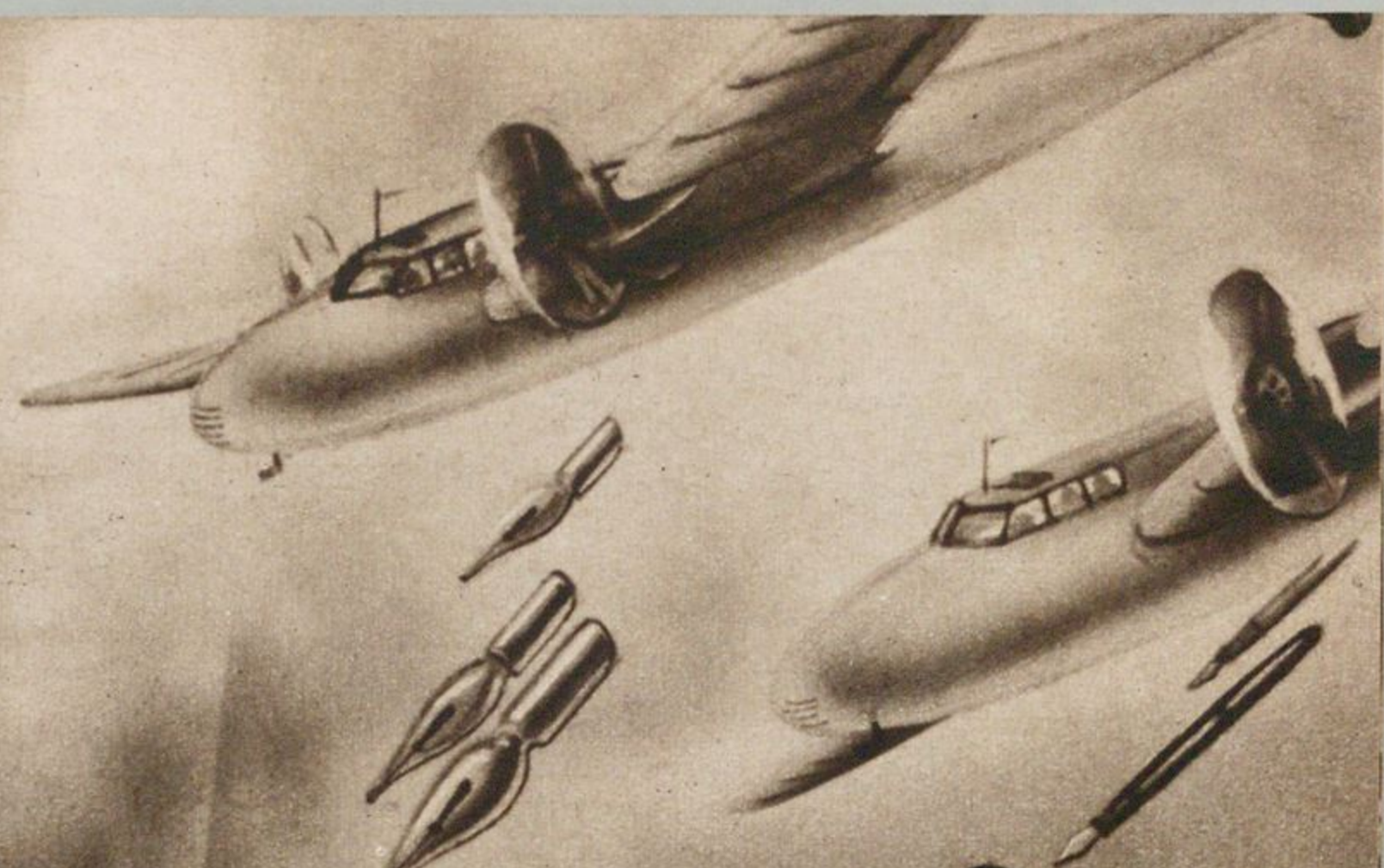
[illegible]屋　綿屋　弓箭屋　酒屋

大きな歴史・小さな歴史

一文字山上にて二千六百年を迎ふ——皇紀二千六百年の一月一日、事變發端の地、一文字山では在留邦人の合同拜賀式が行はれた。この日、曉かけて參集した北京およびその近郊の日本人約一萬二千。思ひ出の聖地で宮城を拜し、日の丸を仰ぎ感激を新にした

軍團旗授與——皇軍と協力して北支治安の第一線に活躍する治安軍八ヶ團に對する最初の團旗授與式が一月十五日北京德勝門內武廟で行はれた。——寫眞は參列せる治安軍

新民會早くも二周年——臨時政府と表裏一體宣撫工作に或は治安の確保に努力し來つた新民會は舊臘二十四日、第二周年を迎へ、新民會長王克敏氏をはじめ日支要人參列、盛大な記念祝賀を催した。——寫眞は鍬やショベル等を擔いで式に參列した北京四郊の青訓生

臘八粥——臘八（ラバ）即ち十二月八日（本年は新暦一月十六日）で、この日は佛教で釋迦悟道の日となつてをり、佛家では臘八粥といふお粥を食べる。一般民家でもこの例に倣つてをり、佛寺では貧民にこのお粥を施す。——寫眞はお粥を貰ふ貧民たち

無敵！國産第一位

新生國策 白金ペン付

クラウン万年筆

流線型

書きよく
體裁優美
構造堅牢

スラスラ書けて
錆びず値の廉い
國産の逸品！

ムッソリーニペン

大阪 株式會社 澤井商店

天壇・冬至・玉女獻盆

村上知行

天壇に、私は既に何遍か足を運んでゐる。青草の繁り茂つた夏にも訪れた。その草の霜に傷んだ冬にも訪れた。訪れる度に、いつでも私はかう思ふ。『これは天下泰平の代物である。今日のやうな亂世にはチト不向きであらう』と。

天壇の出來た時代が泰平であつたか、泰平でなかつたか、私はよく知らない。嘗て私の舊著「北京」にも誌した通り、それは明の嘉靖九年――西曆一五三〇年――に築かれてゐる。時の天子は世宗だが、この人は中國で排日の第一聲をあげた人らしい。則ち天壇を造つた同じ年に、日本人の明に對する往來を禁じてゐるのである。日本人を寄せつけず、天壇に立つて祈つてさへをれば、四百餘州は安全だと、かう思つたのかもしれないし、また恐らく今日の中國にも、さう思つてゐる人は澤山ゐるだらう。

もつとも天を祀るといふことは、古代からして行はれてゐる。從つて天壇が作られたのも、決して一つや二つではなかつたらう。のみならず山の絶頂の平かな事を、天を祭る壇に似てゐるといふので、天壇と呼んだ例もある。だが兎に角、今日に殘つてゐるのは北京のだけだ。そしてそれが明の嘉靖九年に建てられたのは、この時、天地分祀の制が確立された結果であつた。

だが同じ年、西洋では中世から近世への大革命の嵐が、一天文學者の書齋の中で醞釀しつゝあつた。例のコペルニクスが起稿してから二十餘年を費した大著 De Nevolutionibus Orbium Coelestium を、やつと此の年に脫稿したのである。尤も坊さんたちの反對を虞れたので、原稿は更に十三年間、篋底に祕められてゐたが、兎に角彼はこの著作によりトレミーの天動說を木ツ葉微塵にやつつけ、宇宙を科學的に觀る大きな基礎を打立てた。

東洋では、しかし宇宙を科學的に觀るなど、以ての外の沙汰であつた。東洋は何でも彼でも神さまにしてしまはないと納まらず、たうとう天まで祭祀の對象としてしまつた。お蔭さまで、西洋人が革命また革命で、血潮をあびながら喘いでゐた最中、東洋では天を祈つて、百官、賀表を遞してゐればそれでよかつた。有難い仕合せである。

天壇の祭は、私の舊著にも記した通り、每年冬至の朝、未明に天子みづから出御して執り行はれた。だが民間では別にこれといふ祝ひもなかつたらしい。「燕京歲時記」をみても、

「冬至は天を祭る令節である。但し民間では別に何事もなく、唯だ餛飩を食べるのみ。これは夏至に麵を食べるのと一對をなして居り、だからして京師では〃冬至餛飩、夏至麵〃といふ諺もある。」

と書いてあるだけだ。文中、餛飩とあるのは、日本で俗に「ワンタン」と呼ばれてゐるものである。

今日、冬至に巡りあはせても別にこれといふ民間行事の見られないのは、さうした昔からの慣しに從つたものであらう。人民はこの通り、冬至に對し冷淡だつたが、そのかはり皇宮內では

內容

大變で、この日を期し一齊に泰平の象のパレードだつた。何でもやゝこしくしないと承知しない中國の知識人たちは芽出度い冬至を、單に冬至とだけ呼んでゐたのでは氣がすまなかつたらしく「長至」といひ、「亞歲」といふ。この外に「履長」といふ言葉もあつて、冬至の慶賀を「履長之賀」といふ。

一體全體、この日がどうして天を祀つて大騷ぎしなければならない程芽出度いのか、私にはまだはつきり呑込めない。成程、芽出度い謂れを記したものはある。たとへば……。

清朝の時代、北京に昇平署といふのがあつた。これは日本人にもその名を知られてゐる唐代の梨園に倣つたもので、つまり宮中お抱への俳優たちは、普段お召しに應じ技を演じたばかりでなく、佳節々々には必ずその時令に應じた芝居を皇宮で披露しなければならなかつた。さうした芝居の脚本は、昇平署の祕本として、民間では演ぜられなかつたけれども、それが今でも殘つてゐる。中に「玉女獻盆」と題されたのがあつて冬至の出し物だつた。自然その劇詞を見ると、芽出たい理由がちやんと語られてゐる。今その筋を摑いつまんでみると左の通り。

先づ登場するのは華山に棲んでゐるといふ仙女の明星玉女である。手には洗面用の盆を捧げ持つてゐる。

『歲ごとに冬至の日になりますと、姿は髮を梳ること一千二百回、これを神仙の洗頭法と申します。盆に湛へた水は碧綠に澄みわたつて、乾きもせず、溢れもせず、人若しこれにその容顏を映じたならば、千萬年の永き壽に惠まるゝといふ。謂はば仙家の寶物ですが、今日は幸ひ冬至の佳節ですから、天子の御許に參り、この寶を獻上致さうと思ひます。』

彼女は斯ういふ風な意味のことを歌唱しながら軈て退場する。

入替りに南極老人、暘谷神王、玉虚道人、青童の四人が、袂を連ねて雲霄より下つてくる。

『またしても冬至の日が參りました。お芽出度うござる！』

と最初に口を切つたのは南極老人だ。他の三人は解せない顏しながら

『我々仙人の世界は、乃ち不老の世界である。冬至も絲瓜（へちま）もないではござらぬか！』

と反問した。

『いやいや、なかなかさうではござらぬ。今日の子の刻、一陽甫めて肇まり、人の世でも天上でも、それぞれ慶賀の儀禮執り行はれ、決して輕視なし難い大切な佳節なのぢや。』

南極老人はかう彼等を說得した。それではといふので、一同は祝賀のため禁闕に赴くことにした。

途中、ばつたり出會つたのは太陽星君——つまり神化された太陽そのものである。

『どちらへ赴かれますか？』

と四人が聲を揃へて聞くと、

『下界は聖皇の御宇である。因つて上帝の御旨を奉じ、嘉祥を獻ずべく參る途中ぢや』

と答へた。

次いで雲童——雲の仙人たちが駈けつけ、最後に前の明星玉女が、四人の仙女と共に現はれる。南極老人はじめ、前からゐた連中が恭々しく挨拶すると、玉女は徐ろに口を開いて、あなた方は此れより何方へ行かれるのかと質問する。

『冬至の佳節故、これより參內し履長納慶の章を頌（しよう）するつもり』

と一同が答へる。仙女たちも一人一人、ある者は鳳唳（ほうれい）の簫を以て彼等の頌に和せんといひ、ある者は四靈の絃を以てそれに和せんといふ。仙女たちのことであるから、笛で、三味線でと、分り易く簡單には言つてくれない。

『では、此處で先づそれを試演願ひたい』

といふ玉女の提案により、所謂「履長納慶の章」が詠はれる。その文句は

聖軒皇之垂衣兮
心羲晝而聲律同
泰階炳而瑞雲靄兮
開文治而熙酒風

といふ風な、まるで屈原の楚辭の出來損ひみたいなもので、私にはよく分らぬ。いや、私が分らないばかりでない。こんなものが舞臺に歌はれたんぢや天下の何人と雖も聞いただけでは分るまい。

歌が終ると、今度は玉女が例の盆の功德をもう一度繰返して述べる。結局一同の推擧によつて彼女が先頭に立ち禁裏に向つて出發するのであるが、この一幕は最後に

『このめでたき盆を暫し春酒の兕觥（さかづき）にあて聖壽をことほぎ奉らん……』

といふ玉女の歌で終つてゐる。

筋は簡單だが、今日の支那劇に鑑みても、舞臺面の絢爛さは想像するに餘りあるだらう。

しかし、芽出度さの理由は矢張り漠としてゐる。要するに天壇といひ、そのお祭りといひ、冬至そのものといひ、世が泰平なら芽出度い。そのかはり亂世には甚だふさはしくないのであらう。

支那兵隊の沿革

新島瑞郎

今から四千六百年程前支那の蚩尤といふ一諸侯が黄帝軒轅氏と戰つたといふことが史上に見えてゐるがこれが支那の文献に見える最初の戰爭である。

當時の戰爭は原始時代の各人相搏つといふ狀態であつたが、黄帝はこの戰に指南車なるものを用ゐた。この指南車といふのは今の戰車で、前方に武器を持つた兵卒が立ち、後方に將官が指揮をとつたといはれてゐる。

また一說に、蚩尤といふのは頭が銅で、額が鐵、おまけに四目六手といふ怪物で、これが戰ひになると雲や霧を起してさんざん黄帝を苦しめる。方角が判らないので黄帝は度々敗北した。そこで黄帝はいろいろと考へた末、どんな雲や霧につゝまれてもすぐ方向を知ることの出來る指南車を發明したと云ふのである。

しかし黄帝自身が實在の人物かどうか判らぬし一種の傳說であらう。

それはさておき、支那に兵制と云ふものが確立したのは周の襄王時代（今から二千六百年程前）で齊國の管仲と云ふ人の手で完成されたといはれてゐる。當時の社會制度は氏族制度であつたから大體に於て兵農不分であり、同時に一種の義務税の觀を呈してゐたものと思はれる。また工商人には當然その義務がなかつた。管仲の定めた一軍の組織はほゞ左のやうである。

將士及資格	兵數	輜重兵數	車數
伍長（下士）	五人	―	―
小戎長（中士）	五十人	五人	一臺
卒長（上士）	二百人	二十人	四臺
旅長（大夫）	二千人	二百人	四十臺
軍長（命郎）	一萬人	一千人	二百臺

兵役年齢に關しては明文がないけれども大體二十歳から六十歳位であつた。また兵數は管仲の所定標準によると最少四十五萬人とされてゐる。當時の軍隊の中堅分子は所謂貴族「士」で軍務に携はることを無上の榮譽とし、好んで戰ひに參加し、十五、六歳にして勇躍入兵するといふ風で、今の中國青年に見出すことの出來ない剛健な氣風を持つてゐたのである。事變後臨時政府や新民會などが東洋精神還元化運動の一策として嘗て隆盛を極めた支那の武術奬勵に躍起となつてゐるのは時節柄誠に結構な話である。

戰國時代になると軍の編成も次第に變化して來た。今まで車戰を主としてゐたものが騎兵を主兵とするやうになり、その戰爭の規模も擴大されて兵の増員を必要とするやうになつて漸次募兵制度が採用されるやうになつた。

また春秋時代の戰爭は貴族的な甚だ手ぬるい方法で行はれてゐたが、戰國時代には次第に慘酷味を帶び、秦の白起などは韓、魏の捕虜二十四萬人を一時に斬首したと云ふ。秦本紀や秦始皇本紀によるとこの樣な事件が十五回に及んだ。當時の戰爭目的は對手の國を徹底的に潰滅せしむることにあつた。

戰國時代に最も勢威を揮つたのは秦であるが、秦は早くから兵制を重視し、徴兵制を施行して尙武の一法として軍功を重んじ、之に爵位を與へたので、秦の男子は好んで兵隊となつた、秦の始皇帝が一時であつたにしろ中國を統一したと云ふことは、この徴兵制度の成功にあることを見逃してはならないのである。後世の人からは、秦の始皇帝といへば、非常に暴虐の天子として惡く云はれてゐるが、實は中々聰明で且つ大政治家であつたのである。

漢の時代になつてからは大體に於て秦の徴兵制を踏襲したのであるが、この制度は完全に行はれず次第に募兵制に變つて行つた。

當時支那の邊境には匈奴が勢力を持ち屢〻侵入を試みて來るので、漢の武帝は邊境を防護するために屯田兵法を實施した。然し當時の國民は太平に馴れて惰弱であり、自から邊境に行くことを好まなかつた。そこで武帝は浮浪人や囚徒をかり集めて、屯田兵を組織したのである。これがため屯田兵の軍律は甚だ亂れた。支那の俚言に「好鐵不打釘、好漢不當兵」好い人は兵にならずと云ふのがあるが、この俚言は當時出來たものである。春秋時代から漢の初期までは總括して軍民不分であつたものがこの屯田兵の實施によつて次第に對立して行つた。三國時代には曹操、劉備、司馬懿などの特殊な人材が

出て一時は尙武の時代もあつたが、漸次兵農は分離して崇文鄙武といふ傾向に陷つたのである。

漢の皇帝を廢し「新」の國を起した王莽は匈奴の侵入が甚だしいので、何か匈奴を征伐するのに新しい方法はないかと云ふので天下に新式の兵器を募つた。その應募の中に「一日によく千里を飛んで敵狀をうかがふことが出來る」といふ兵器があつた。鳥の形に作つたもので、これに乘つて始めは凧のやうに綱であげてもらひ機械の仕掛で動くものであつたらしい。これがどうやら世界最初の飛行機であるらしいが、惜しいかな數十間飛んで墜落したさうである。

唐代になつてからは珍しく兵制が整理されたが、結局は春秋時代の制度を模倣したもので、此時に至つて、火(伍)、隊(小戎)、團(卒)と云ふ名稱が用ゐられ、騎兵、步兵の區分が始めて行はれた。また高宗の時代、外民族の侵入を防ぐため邊境の大切な場所十ケ所に節度使（使兵權を有する地方官）を設置して國境の守りを嚴重にしたのであるが、やがてこれが跋扈して唐末五代の一大禍亂を惹起した。

宋に至つては唐の節度使に懲りて專ら募兵役法を用ゐ、兵役稅に似た制度を採るやうになり、かつて漢の時代に發生した崇文鄙武の慣習は朝廷の政策として採用され、文官が武官を統率すると云ふことになつた。

梁の太祖の頃は軍律が甚しく嚴格だつたので兵卒が多く逃亡した。すると太祖はその逃亡防止策として軍人といふ軍人の面部に記號を刺墨したさうである。所がそれらの軍人は郷里の人に恥しくて歸れぬと云ふので山谷に逃亡して盜賊になつたと云はれてゐる。この刺墨の風習は宋代にも行はれて、かの岳飛などの兵卒にもこの方法が適用されてゐた

元の兵制は成吉思汗の制定したものだが、矢張り步騎兵の二兵種があり、その主力はなんと云つても騎兵であつた。また現今の工兵に類した技術兵もあり、攻城戰などには盛んに火藥が使用された。當時成吉思汗にひきゐられた元軍は遠くヨーロツパに侵入し、ロシヤのモスコウやドイツ領のワールスタツトの町でヨーロツパ諸國の聯合軍を擊破した。

明代では元の時に創建せられた兵制がそのまゝ基礎となり、地方の郡縣には衞所、千戶府などが創立された。一衞は兵卒五千六百人、一千戶府は千人で全國の兵數は百萬を超えてゐた。勿論これらは明初のことで、明の中期になると兵制といふものは全く空名となり、我が征韓役などで交戰した明兵など殆んど臨時の募兵と軍人の家丁とで編制された烏合の衆であつた。もう十年秀吉が在世してゐたならば、紫禁城の王者たらんとした秀吉の夢が或は實現してゐたかも知れない。

清代になつてからは所謂滿洲八旗が清軍の主流となり、當初はその精悍さをうたはれてゐたのであるが、太平が打續くと共に、漢民族の文化に感化されて次第に文弱となり、遂に漢人の臨時募兵を使用しなければ內亂すらも鎭定しかねるやうになつた。そこで康熙帝は漢人の綠旗軍なるものを養成して滿漢併用策を用ゐた。これが卽ち世にいふ以漢制漢の方策である。軍隊の呼稱には督標、撫標、提標などの名稱が用ゐられ、また編成の單位には一營を用ゐた。その後步、騎、砲、工、輜重などの兵種が作られたのである。大體この編成が清軍の基礎となり、明治の中期まで續いた。

現代のやうな新式陸軍の出來たのは德宗の三二、三年頃で日露戰爭の結果を見て日本にならつて作られたものである。この制度は殆んどドイツ人の手によつて作られた。（現在蔣介石の國民軍に見られるものとほゞ同一である。）

日本の師團が支那では師、旅團が旅、聯隊が團、大隊が營、中隊が連、小隊が排、分隊が班といはれてゐる。例へば第一師第二旅、第三團第四營第三連第二排第一班と云ふ樣な譯で、春秋時代と唐の呼稱を混用したものである。一師の兵力は所屬の軍隊によつて差異があるが通常約一萬四千、一萬二千、八千の三種に分れ平均約一萬の兵力があるものとされてゐる。兵種は兵、騎、砲、工、輜重に分れ、騎兵を馬隊、砲兵を礮隊、工兵を工程隊と稱してゐるまた機關銃を機關槍、または機關砲と名付けて一隊を設けて步兵に配屬した。その他軍醫、軍需、獸醫、憲兵、軍樂隊があることは各國軍と異らないが此のうち軍樂隊は比較的に日本より多く配屬されてゐる。之は古來旗鼓堂堂などと稱されてゐるやうに支那人が天性音樂を好むためであらう。軍人の階級は殆んど日本と同じく將校を軍官といひ、將校相當官を軍佐と云つてゐる。また其の名稱も日本と大差なく、將校は少尉、中尉、上尉、少校、中校上校、少將、中將、上將と名づけ、下級者は二等兵、一等兵、上等兵（以上を兵とす）下士、中士、上士（以上下士官）准尉官（准士官）と稱してゐる。

京包沿線
史蹟ところどころ

日比野丈夫

西直門の驛を離れると共に右手の窓から間近に見えてゐた元の土城が、やがてなくなつてしまつたと思ふと左手に圓明園の廢墟がのぞまれる。昌平を過ぎると河北の平野がいつの間にか盡きて突然大行山脈につき當る。こゝが南口である。いふまでもなく居庸關の南口で、北京守備の最後の抵抗線であつたのだ。こゝを上りつめて八達嶺の長城に至る間に居庸、上關の二關があつて、つまり四段の構へが出來てゐたわけである。昌平あたりから前方山麓にのぞまれた明の十三陵を訪れる人はこゝで下車したものであつた。

これから汽車は碧水の岩に激する音をきゝながら、險崖の間を縫うて進む。やがて左手の谷間遙かに有名な居庸の過街塔が見下される。道路を跨いで設けられたまるで關門のやうな形をしたものであるが、元來はその上に塔があり泰安寺といふ喇嘛寺があつたのである。元の至元、泰定頃の建築と推定され、今殘つてゐるこの塔の土臺には內外に當時の佛敎彫刻が施されてある。これが世界的に有名なのは、たゞその彫刻が藝術的に價値があるばかりではなく、內壁左右の四天王像の間にほられた文字そのものにある。蒙古字、漢字はいはずもがな、梵字、ウイグル、西藏、西夏等驚くなかれ七種の文字がきざまれてあつて、世界の學者の目を丸くさせたからである。

靑龍橋驛につく手前から、萬里の長城の蜿蜒たるうねりが雲表高くのぞまれるであらう。長城についてはこと新しく述べる必要もあるまい。これは北方未開民族の侵入を防ぐ城壁であると共に、また漢文化のつちかはれる世界を區切つた目に見える限界でもあつたのだ。漢族の勢が盛なとき、彼等の文化はこれを越えて朔北の彼方にまで延びたであらう。しかし一度び北族の活動が始まると、彼等は馬蹄の音も高らかにこゝを乘り越えて漢族の本地にまでも侵入したのであつた。もとより長城は秦の始皇一人の手になつたものでなく、この附近にしても幾度か修築され又幾度か破壞もされたであらう。現在のものは大體明代の築造になるものといはれる。驛の間近に立つ銅像はこの鐵道の設計者詹天佑である。一切外國人の援助をかりないで獨力この難工事に成功した彼の功績を、無用の長城を築いて民を塗炭に陷れた始皇の暴擧に比較した文を私は誰だつたか或中國人の旅行記で讀んだことがある。

いつしか我々は所謂蒙疆地區に足を踏み入れてゐるのである。さきにも述べた樣に、この地方、特に內外長城に圍まれた長城地帶は、石器時代の悠久な古から南北兩系統の文化が交錯しあつた所である。靑銅器時代になつて南方ロシヤのスキタイ系文化が漸く綏遠、オルドスに入つて來た頃、南方には秦、漢の大帝國が出現し、漢族の勢力は著しくこの地方に進出した。彼等の移住と共に北邊に郡縣が設置され、それをめぐつて長城が築かれた。さうして漢族の文化が一時優勢を占める樣になつた有樣が、考古學的遺物の上からもまた文獻の上からも知られるのである。やがて漢が衰へ三國をへて南北朝時代に入れば、今度は北族の活動期が始まる。中にも今の大同によつて北

魏の國をたてた鮮卑拓跋部は北支那一帶を統一した。

懷來の盆地を過ぎ、宣化盆地に入つた所に下花園といふ驛がある。遼の蕭太后の花園があつたのでその名が起つたといはれてゐるが、昨年の春驛の東方鐵道線路に沿つた山の崖に石窟が發見され、それが鳥居博士によつて雲岡と同じ北魏時代の遺蹟であることが確認された。背後に屹立する山が雞鳴山で上に永寧寺といふ寺があり、その麓の小丘が北魏の昭太后の墓だといはれてゐる。

長城線最大の都市張家口は、古くから北邊の要地として歷代城塞の置かれた所、また外蒙に通ずる重要起點である。明代馬市を開いて蒙古と貿易を始めてから商業地として發達し、清末には光緒二十八年の露淸條約によつて商埠地に指定された。外國人の間では專ら蒙古名カルガンの名で知られてゐる。舊市街と淸水河を隔てた新市街は鐵道開通以後驛を中心として發達したものなのである。昨年蒙古聯盟自治政府がこゝに移つたので、今後の發展はまた刮目して見るべきものがあらう。

天鎭、陽高と長城に沿つて大同の盆地に入る。汽車を下りて棧橋に上れば、眞北に美しい恰好をした頂の平らかな山が見え、その上に大きな土饅頭をのぞむであらう。この山は今では寺兒山とよばれてゐるが、北魏時代には方山といはれたもので上の土饅頭は文明太后の墳墓なのである。更に頭を東にまはせばなだらかな禿山を見るであらう。これが白登山である。漢の高祖が匈奴の冒頓單于の爲に重圍に陷り、陳平の謀によつて辛くも虎口を逃れたといふ有名な處である。山上には今も當時の堡壘が殘つてゐる。大同は北魏の都、平城の地である。その都城は今の大同城の北に營まれたことが、その北方や河を隔てて東にある土城のあとから推定されてゐた。今の城壁の東を流れる玉河が町の中央を貫流して、數多の宮殿が立並んでゐた有樣が、魏の末に出來た水經注といふ本に美しく描かれてゐる。昨年原田博士によつて停車場の東北、玉河の西岸に、當時の宮殿の礎石が發見されたことは、平城の調査に新しい光明を投じた。驛前にその礎石が二三箇移されて保存してあるのに注意してほしい。遼、金の時代には大同は西京とよばれるが、その城址は今日の大同城そのものであらう。勿論現在の城壁は明初の修築であるが。城內には有名な寺が三つある。下華嚴寺や善化寺には遼金時代の立派な殿堂が殘つてをり、そこにある佛像はまた當時のものである。上華嚴寺は、建築は新しいけれども、やはり遼代の陀羅尼經幢などが殘つてゐる。東大街にある明代王府の障壁といはれる九龍壁は北京北海のそれ程華麗さはないが、それだけに時代の古さが感じられる。

大同といへばすぐ石佛を聯想する程に雲岡の石佛とは緣が深い。雲岡は大同から西四里餘りの山中にあつて、バスで約一時間の行程である。こゝについては到底詳しく述べる餘裕がない。たゞあの多數の石窟群が決して一時に作られたものではなく、初期のものには支那文化の上に西方文化を自由に攝取した北魏人の進取的な氣象が溢れてゐるに反し、後に作られたもの程支那的な色が濃いといふ拓跋部の漢文化に同化されて行つた過程がはつきりと認められることを記すに止めよう。

長城を越え平地泉で九十度方向を變へた汽車に大青山を右に見ながら眞西に進む。厚和は詳しくは厚和豪特、蒙古語ホ、コトの音譯である。驛に近い新城は乾隆に築かれた綏遠城で、小半里ばかり西に離れた舊城が明代からの歸化城だ。民國になつてから兩者を合せて歸綏とよばれた。汽車が驛に近づかんとする前、南の畠の中に美しい白塔が聳えるのを見るだらう。遼末の建築になる八角七層の磚塔で、もとこゝには大明寺といふ寺があつたのである。厚和を隔ること八里、この附近は遼金時代の豐州天德軍の遺址であり、元初こゝを通つたかのマルコ・ポーロがテンドウクの名で傳へてゐる所に外ならぬ。舊城には幾つかの大きな喇嘛寺がある。大招（無量寺）、小招（崇福寺）、錫拉圖招（延壽寺）、五塔寺（慈燈寺）等一度は尋ねて見なければならぬ。

有名な王昭君の墓といはれる古墳は、南五里餘り黑水のほとりにあつて青塚とよばれる。高さ二十何間かの塚は、汽車の窓からものぞまれる筈である。古くから語りものに劇に演ぜられた王昭君の傳說は改めて述べるまでもない。今日でもこの芝居は名伶尙小雲の十八番だ。北の方陰山を越えて武川に出れば百靈廟も遠くはない。

磴口驛の附近で始めて大黃河の偉容に接する。包頭について先づ我々が車を走らせるのはやはり黃河の岸である。それから町の西北龍泉寺の山に上つて黃河を俯瞰し、遙か彼方にオルドスの山々が連る雄大な眺め――蒙疆一といふ風景――を滿喫すればもう京包線の旅も終りである。

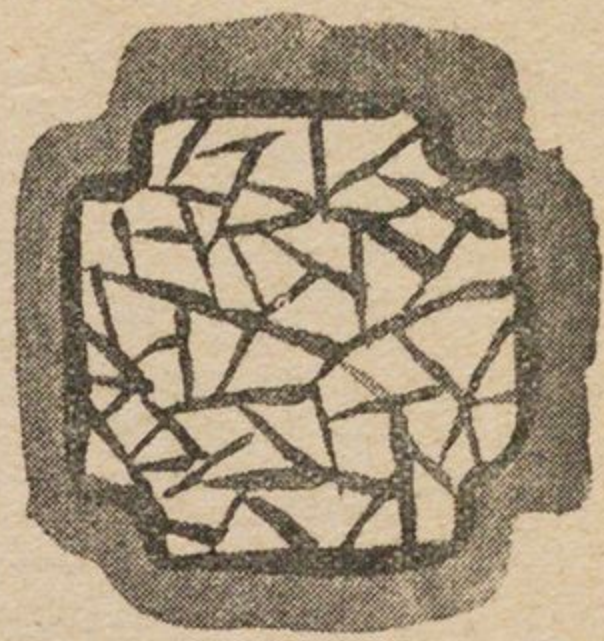
×

北京人の味覺道樂

石原巖徹

千年の古都北京――この古都といふ意味は單に古い昔の都であつたといふだけでなく、古くから都として續いて來たといふ意味が重要なのだ――それだけに都人趣味に根ざす贅澤な飲食品が發達し、或は特に此地に限りよりよく供給されてゐる。例の支那酒の王者たる紹興酒にしてからが、事變後本場からの供給が絶えてすでに三年にもなるといふのに、まだいくらでも佳いのが飲める。この酒は事變前から――即ち昔から――長江以北では北京にだけしか佳い品が來ないことになつてゐるのだ。それから日本人の豪快趣味によつて名づけられた例のヂンギスカン料理。由來を知らない人（日本人）はこれを蒙古から傳はつたものと考へるらしいが、實は北京人士の味覺道樂から案出したもので、凡そ蒙古人の生活とは緣もゆかりも無いのである。また北京の支那料理中數的に王位を占めてゐる山東料理なるものが、由來はとにかくとして、決して山東では食へないのである。いふまでもなく北京人によつて贅澤化され美味化されたものだ。

多になつても贅澤な支那料理には新鮮なみづみづしい色の胡瓜が盛に使はれる。香椿豆腐といふのは、豆腐に香椿（和名チヤンチン、ニワウルシ？）といふ樹のキの一種、或はシンヂュの嫩芽を刻んでかけた料理で、支那酒の肴に頗るオツであるが、これが特に嚴多の候に盛に用ひられる。胡瓜の方は或は溫室栽培の方法もあらうし、大して不思議にも思はなかつたが、この香椿には一寸驚かされた。南方の暖い處から送つて來るにしても、果してその時分に香椿の嫩芽が得られるかどうか、得られたとしてどんな輸送方法によるのかなどと不審を抱いてゐたが、豈はからんや、これは胡瓜などと一緒に北京の郊外で溫室に栽培されるのである。

冬季これらの贅澤な食品を供給する溫室の所在地は北京城の南側主として右安門外の一帶であつて、廣安門外にも多少ある。城壁によつて北風の冷氣を遮られ、南向の日當りの好い暖い處を擇んで、地下五尺ばかりを掘り、そこに狹い東西に長い畑を作り、その上に地上五尺ばかりの高さにかこひを作る。その北側に當る部分は泥壁として、上部及び南側に當る部分には油を塗つた紙を障子の樣に貼る。畑の下はオンドル式にして、一方に設けた竈から火を焚いて暖氣を通す仕掛になつてゐる。畑の中央には豌豆を栽ゑ、例の香椿は三四尺の丈の苗木を概ね北側に植ゑる。南側の日當りの最も好い處には胡瓜を作るのであるが、これは少々念が入つてゐて、全部鉢植にしてならべる。胡瓜は秋分の前頃に鉢に種を蒔いて日當りの好い處に置き、芽が出て少し育つた頃に寒くなるので、それを溫室に持込むのだ。こゝに愉快なのは、もともと季節外れの栽培で無理を通さうといふのだから、胡瓜は生つても、お行儀が惡くヒン曲つて育ちたがる。それを矯正するために孔あき錢か何かで餘り重くないオモリを作り絲でそれを尻にくゝりつけて「寶物」になるやうな形に成長させる。蟲媒（結實を促すもの）の代行として、鷄の羽毛を用ひて花粉を接觸させるのも苦心の存する所である。何時頃から始められたものか知らないが、筆者はこの溫室の存在を知つて、今更ながら北京の都人趣味から來た飲食品の發達に驚いた次第である。

支那建築の話

村田治郎

支那建築にはどんな種類のものが包括されるだらうか？　こんなわかりきつたやうな質問が、實は非常に難問で專門の建築家にも卽座には答案が書けない。それは結局、建築といふ言葉の內容を廣くも狹くも解釋出來るからであるが、假りに可なり廣い意味にとつて諸種のものを類別すれば、次のやうなことになる。

一、非宗教的建築
　1、城……萬里の長城、一般の城堡、それに附屬する關門や門樓など
　2、宮殿、王府
　3、住家、店舖
　4、衙門（卽ち役所）
　5、劇場、客棧、飯店、茶館、會館など所謂公共的性質の建築
　6、城內の鐘樓、鼓樓、牌樓
　7、橋梁、亭榭、園林、石碑

二、宗教的建築
　1、壇・廟
　2、道教建築（民間信仰の建築を含める）
　3、儒教建築……孔子廟（卽ち文廟）や書院
　4、佛教建築……寺、塔、幢、窟
　5、喇嘛教建築……寺やラマ塔
　6、回教建築……清眞寺
　7、シヤマニズム建築
　8、陵墓

こんな風に別けたものの非宗教的、宗教的の何れにも屬するものが少くない。牌樓とか石碑などがそれである。

右の諸項の中には猶ほ說明をして置きたいものがある。宗教建築の中で特に支那的性格をよくあらはしてゐるのは壇廟と道教建築とであらう。その壇とは天壇、社稷壇、先農壇など、廟とは太廟、東嶽廟、關帝廟、帝王廟のやうなもので、何れも爲政者が中心になつて祭儀が行はれ、格が高かつた。

純粹の道教建築は道士が專念に修業を行ふ道場であり、その主體として老子その他の諸仙を祀る多くの殿が置かれる。これを普通に道觀と呼び、北京の白雲觀は中でも最も有名な大本山である。しかし其の他に我々が便宜上から道教と言つてゐる民間信仰の神々を祀る廟がある。例へば火神廟、土地廟、娘娘廟などがそれであり、壇廟の廟との間に十分な區別を立て難い場合が少くない。

儒教建築とした孔子廟もまた壇廟の中に含まれるのであるが、この際は一般の廟から切りはなすことにした。孔子廟は儒學を重視する學者及び爲政者によつて成立するもので、一般民衆の信仰支持をうけてゐるとは思へない。これを果して宗教と言ひ得るか否かは甚だ疑問であるが、假りに宗教の方へ入れて置かう。ラマ教は西藏から傳へられた佛教の別派であるが、一般佛教とは餘りに違つた要素が多いから、これを別項に擧げるのは當然だらう。

原始宗教シヤマニズムに屬する建築が、淸朝が滿洲より北京へ乘り込むと同時に、宮中の儀式用として建てられてゐた。北京の宮殿の中央北部にある坤寧宮とその前に立つ神杆とがそれであり、また華北交通會社の少し西に今は米國の美術硏究所などと記されてゐる一郭が、嘗ての堂子と呼ばれたシヤマニズムの中心殿堂であつた。しかし極めて稀少な例であるから、これは敢て一項目を立てるまでもないかとも思ふ。

以上の諸種の建築を更に細分して、大門、二門、廊、廡、殿などと個々の建築をあげれば際限もない。しかし其の無數の建築群の一切を代表するのが宮殿建築である點に、支那的特異さが明かに認められる。

宮殿を簡略にしたのが王府であり、王府を小規模にしたのが上流の邸宅、邸宅を簡易にしたのが一般の住家であるのは言ふまでもないが、諸宗教の建築の如きものまで殆んど王府や邸宅と大差ない建築の配置と規模を示してゐるのを見逃してはならない。

支那ではもろもろの神がそれぞれ位をもつてゐて、東嶽神とか關羽などは帝の位による祭儀が行はれ、從つて帝位に相當する格式の殿が建てられる。支那では山でも川でも海でも、また雷とか火とか星とかでも、すべて人格化

して考へて帝や王の位を贈られ、それ相當の格式の殿がつくられる。宮殿建築の亞流が出來たのは當然である。

北京の宮殿を一覽してもわかる通り宮殿の中にはあらゆる種類の建築があり、而もそれは同一種類の中の第一等と言へるものばかりの集合である。牌樓、門、廊、殿、閣など最善最美のものが宮殿建築群に於て始めて見出されるが、更に景山、北海、萬壽山などでは庭園、亭榭及び宗教建築の粋までも完備してゐる有樣である。

宮殿の中では未だ全部を盡しかねてゐる宗教建築に於ても、天壇とその附屬的建築のやうなもの、さては承德の壯大無比なラマ廟などが、皇帝の勢力を背景にして始めて出來上つたことを思はなければならない。從つて支那建築の中心的推進力は常に皇帝の權力にあつたと言つてよからう。

エジプトでも印度でも、また物質主義の權化のやうに言はれる歐洲でさへも、上古から中世へかけての建築の中心は宗教にあつた。ところが支那では皇帝の宮殿を中心とする傾向が、上古から極く近年まで一貫して續けられた。同じ傾向を示した例は古代の西南アジヤにあつたが、それも支那ほど永く續いたのではない。以て支那建築の特異性の一面が知られるだらう。

なほ一言して置きたいのは、支那人が宗教心の極めて稀薄な民族だといふ說である。右に述べたやうに支那では皇帝の權力が中心となり、神々でも皇帝から位を贈られた點を考へると、如何にも宗教信仰心の劣つたもののやうに思はれよう。この說が可なり廣く行はれてゐるのも當然のやうだが、私はこれを誤解だと思つてゐる。

支那人の宗教に對する態度とか信仰の表現方法が、西洋人などと著しく異なつてゐるために、單に表面的の觀察をして誤解を生んだのだらうと思ふ。

そのことは支那古來の宗教史を見ることによつても說明せられ、單に日本へ佛教的學問及び信仰を傳へた頃の支那の隆盛な佛教を思つても想像出來る筈である。支那建築の分類をすれば宗教建築の種類が非宗教建築よりもむしろ多いほどある事實、支那の都邑で寺廟の建築が民家に比して一際立派である事實、どんな小さな部落でも小祠の一つや二つは建ててある事實を顧よ。支那民族の宗教心が薄いなどと言へる理由はなく、他民族と同じやうに宗教が庶民生活の中樞に入りこんでゐる所は多い。

だから支那に於ても宗教建築は最も重要な部門を占めてゐるのである。

支那建築の起原をたづねるときは、結局支那民族の發生した太古にまで遡らなければなるまい。それは支那建築が支那民族によつて創められ、支那民族の成長發展に伴つて發達をとげたものだからである。

現在見るやうな姿の支那建築は何時頃から出來たのだらうか？　非常に古い遺物が全くないので何とも言へないのであるが、遲くも西紀前二、三世紀頃には殆んど現在のに近いものが出現してゐたらしく思はれ、恐らくそれよりもずつと昔から既に支那建築としての特性あるものが完成してゐるのだらうと想像せられる。勿論、後世になつて次第に種々なものが加はり、形の變つたところもあるだらうが、それ等は大體に於て部分的なものにとどまり、大勢を一變させたのではなかつた。

さうして見ると、支那の建築は少くとも二千數百年來ほとんど同じ姿を保ち續けたことになり、變化を主として考へるときは甚だ遲いテンポだつたと言はなければならない。ここにも支那建築の一特性が認められる。

尤も遲いテンポは支那ばかりに見るものではない。古代エジプト、古代西南アジヤなどの建築も實に數千年間、同じやうな建築樣式を繰り返へし用ゐたのだつた。ところがギリシヤからロオマに及ぶ古典(クラシツク)建築は未だ八、九百年も續いたが、それから後の歐洲建築は大抵二、三百年位で樣式に變化が起り、十八世紀以後は特にテンポが非常に早くなつた。かうした歷史を見るとテンポが遲いことは、やゝ東方的性格らしくもあるが、それよりは古代的性格と言つた方が一層よささうに思ふ。

支那建築を一見したところでは、どこも彼處も純支那的で、外國からの借り物はないやうに思はれるが、實は支那で創められたのでない部分もまじつてゐる。佛教、ラマ教、回教などの外來宗教の建築にはそれが顯著である。佛塔もラマ塔も起原は印度にある。支那の裝飾文樣や彫刻類は、殆んど外來宗教美術の影響をうけて發達したものである。

それが今では外來とは到底思はれないまでに支那風になりきつてゐる。此の同化力の極めて强大なことが、また支那の特色ある一性格と言へよう。近い將來に歐米心醉の夢がさめると同時に、支那の建築は再び本然に立ちかへつて、歐米樣式の支那化が始められることであらう。われ等の期待もそこにある。

分頭相續

みづの・かほる

北支の農村部落は、例外なく集團してゐることは、前にも述べた通りである。この部落集團の初期は、戸口が少かつたものが次第に殖え、勞働力も増し、當時は比較的土地も豐富であつたために、部落の歴史には、繁榮の一時代をもつてゐるのが常である。

しかも昔から、北支は大家族主義で、五世同居とか、七世同居とか、とてつもない大家族があつた。そしてそれは醇風美俗として世にたゝへられ、時の天子から扁額が下つたりしたものである。北支の農業經營は、家畜と人間が組み合はされて行はれる所謂有畜農業で、有畜農業は、この大家族で、大地積を耕すほど能率的であり、有利であるのである。この豐富な家族勞働と、豐富な大家畜で、大地積を耕作した時代の農村は、さぞかし豪勢なものであつたらうと思ふ。さればこそ、かうした農村のもとに、その昔、北京城のやうな大建設工事もなし遂げられたのであらうと、筆者は思ふのである。

ところが、こゝに人口の節度無き増加と、分頭相續制度が、いつまでも泰平な農村にしては置かなかつたのである。筆者は、次に述べんとする分頭相續の制度が、今日見るところの北支の零細農群を作つた一大要因だと思ふ。

そこで、分頭相續とはどうした制度であるかと云ふと、親の財産を男の子に均分して相續さすのである。土地も、建物も、家具什器も、家畜も、借錢も、貸金も、すべてを等分してしまふのである。長男も末子も一樣に分けられる。たゞ、老父母の養育費にあてるために、一部の土地を、或は金を殘して子供のだれかが請け合ふ場合がある。或はかうした養育費の財源を、別にとらないで、兄弟が交替に養育する場合もある。

農村の戸口調査に、農民の答へに、屢〻何人半といふのがあるのにぶつかるが、筆者も最初は、この半分の人口は、多分姙婦を一人半と數へるのだらうと思つたのであるが、實はこの老父母の交替養育で、兄と弟が一人の親を抱へてゐるといふことであつた。三人兄弟になれば、人口は疑ひもなく〇・三分三厘であるわけである。

土地の分配は、一筆で大きいものは分割する場合もあり、適宜地價を定めて分けるやうであるが、別に登記もせず、兄弟の間に分割の契約證をもち、税は父の地權名義で納入する。これが更に孫にまで分割されたりすると、地權の內容は實に複雜多岐で、農村實態調査の際に苦勞をする點である。

建物などは、支那の家は分けるのに都合よく出來てゐて、分頭相續にはあつらへ向きである。四間なら二間づつ、三間なら一間半づゝ自由自在である。家畜は都合によつては、四本足を二本づゝ分けて、とりあへず共同飼育をやる。大農具も共同物として殘す場合が多い。茶碗や箸は分け易い。借錢を分けるにも、少しも骨が折れない。

ところが絕對に分けぬものは墓場であり、絕對に分ち得ぬものは、同族間の血の流れである。

分頭相續も、所有地が大きくて分割されても、一戸の農業經營に支障を來たさない內はいゝのである。分頭相續の弊は、土地が細分されて零細農を生み出すことにあるのである。もうこれ以上分けては、兄弟お互に困るのだからと、あとは長男にまかして、二男三男は出て行つてくれるといゝのだが、習慣の惰性は恐しいもので、もらへるものならもらつて置かうといふ樣な調子で、甘んじて猫額大の土地を抱へた貧窮な零細農に墮ちて行くのである。

吾々日本人から考へると、どうせ喰へない少い土地を耕してゐるより、むしろ家のために長男に讓るか、それとも分けてもらつた土地を賣り飛ばして、都市へ出て行くか、滿洲出稼ぎでもと考へるのだが、彼等は中々部落を離れようとしない。これも一つには、分頭相續制度が、男子郷關を出づるの氣魄を挫かすのである。その點日本の二男三男坊とは違ふ。親の足を分けてかゞるのが當然の制度であるのである。

それから、も一つ彼等が零細な土地を抱いて、親讓りの稼業を續けて行くといふことは、彼等の土地に對する執着が強く、土地に對する根強い信仰からも來てゐる。

さて、分頭相續によつて土地が零細となり、貧乏することがきまつてゐるならば、なるべく昔に歸つて、大家族主義にやつて行くやうにして、分家を喰ひ止めたらいゝぢやないかと考へられぬでもない。ところが、この大家族主義は、昔のやうに家長專制のもとに動物の如く孜々として働いて、そして

喰つて日が暮れゝばいゝと言つた時代にはよかつたが、今日のやうに文化が向上して、社會が複雜になつて來ると、思想の上に、經濟の上に、大家族であると、常にごた〳〵が斷えない。

今日の北支には、從前のやうな大家族の農家が無いといふことは、統計の上にも、北支農家の一戶當り人口は五人そこ〳〵である點からも、はつきり窺へるのである。特別僻遠な農村ならともかく、河北山東平野の農村であると、一戶二、三十人もの家族は極めて珍しい方で、この種の農家は必ず地方の豪農に限られてゐるのである。

しかし、吾々の農村調査の結果によると、今日の大家族制度の崩壞は、決して遠い昔のことではなく、こゝ數十年來のことであり、その主なる理由は、次のやうなことが言へると思ふ。

一つには、廣大な建物に大家族を抱擁し、大耕作し、大家畜を飼育して生活を營む時は、常に匪賊の目標となり軍閥の搾取の對象となること。

二つには、經濟生活の發達と、思想の向上は、肉身の間に於ても、古來からの謙讓的忍從的精神を失ひ、家長の專制的命令が行はれなくなつたこと。

三つには、農村に於ける交換經濟の發達により、自給自足の所謂働き而して喰つて足るの生活に異變を來たし、彼等に迫る貧窮から常に不和爭闘を招くこと。

かう言つたことから、大家族が分割せられて行くのであるが、とかく家のごた〳〵は、えて女同志から始まることは、北支も日本も變りはない。北支の分家の火元も、兄弟の嫁同志の仲違ひから起る場合が多いのである。

大家族崩壞の一例について、青島背後地の膠縣の一農村で、筆者が調査したところによると、現在一二五戶の部落が、四〇年前には六〇戶であつたといふ事實である。これによると、四〇年間に、部落の戶數は約倍加したことになるのであるが、その實人口は左樣に增加してゐるものではなく、如上の分家によつて戶數が急激に增加したものである。

尙こゝの部落に、孫某といふ一農戶がある。彼の父の時代には、八〇畝の土地を所有し、當時部落に於いても、最も裕福な農家であつたが、今から二十五年前、五人の兄弟に分割され、孫某は一八畝を相續した。孫某には、今三人の男子があり、長男と次男はすでに妻帶し、長男は二人の男の子を擧げてゐる。近々末の三男が妻帶するのを待つて、分家すると言つてゐるが、こんどは一人當六畝となるわけで、八〇畝所有の一農家が、二十數年にして六畝の零細農に分割されたことになる。更に十四、五年もすれば、六畝の土地は分割せらるべく二人の孫が待つてゐる。全く人ごとのやうに思へないのである。筆者は、北支農村問題の內で、この分頭相續制の慣行は、正に重要課題の一つであると思ふ。

以上分頭相續について、くど〳〵しく物語つて來たが、この制度がまた一面には、部落民へ土着を强ひ、更に北支農民の信仰的土地所有欲が、部落農民の移動を極度に制約してゐるのである。このことはまた、少くとも北支農村部落が、今日まで封建的な、そして素朴な性格をもち續けさして來たものだと言ひ得るであらう。又よしんば、大家族主義が、今日の如き崩壞を見たとしても、一旦大家族制度のもとに養はれて來た隣保協助の精神は、今尙脈脈として傳へられてゐるのである。

かくて、部落の集團は、血緣と地緣とがからみ合つて、宗族的、血族的、地族的共同體をなしてゐるのである。吾々は今後北支の農村を見る場合にかうした農村の生ひ立ちを理解しこの部落農民の結合力を活用することこそ北支農民把握の要諦であると思ふのである。

北京巷談

路傍の氣焔

宇 澄 朗

古いところでは三國、文武百僚を左右に侍立させた曹操の面前、素ッ裸になつて軍鼓を鳴らし、面と向つて曹操を痛罵した禰衡、今でも撃鼓罵曹のお芝居で、觀客に限りなき痛快味を滿喫させてゐるが、古今時勢の大きな變り目には、奇士歟狂士歟、とてつもない畸人が飛出しては、ともすれば味なき歴史に感興を添へるものである。

清末光緒、戊戌の政變でまた／＼西太后の垂簾に逆戻つて間もなく北清事變勃發し、國家累卵の危急に際した時ボロ／＼のつづれを身に纏ひ、德利を手にさげて喇叭飲みに飲みながら「時非なり、悲しからずや」と北京の街々を歌ひ廻つた「郭雲五」俗に醉郭といふ奇士があつた。

幾何もなく民國初年の頃、また一奇士北京街頭に現はれ、披髮道服、毎晨街々を廻はり、木梆を叩きながら

　東雲の光
　夜は明けぬ
　何んぞ醒めざる

と歌ふ。誰れもが氣狂ひ呼はりをするが、本人は耳にもかけずまた歌ふ。

　身は狂ひたりけん
　されど心はいと靜か

好奇の人たち、その次第をたゞせば

　人みな醉へり
　たゞ吾のみ醒む
　世を擧げて濁れど
　たゞ吾のみは清し

と歌ふばかり。奇士俗稱「李六更」本名は何、生れは何處、知る由もなく何處へ往つたか竟に杳として判らない。

◇

いま北京城南天橋の盛場で、藥糖を賣る大兵黃といふ畸人がゐる。身のたけ六尺、來年は八十の老翁ながら、筋肉のもり上つた仁王の如き胸をたゝき
「さア／＼この飴を買つた／＼。毎日二つか三つ喰つてみろ。心が澄む。肚がすわる。膽も太くなる。男の中の男一疋となりたい者は喰へ。ヘナ／＼男には用がない。どいた／＼」

さても傲暴な飴賣りよ。破鐘のやうな聲で呶鳴る。見物はもう黒山。
「逃げ出した奴はなさゝうだな。見渡すところ、どいつもこいつも男らしい奴ばかりだ」

いかにも我意を得たといふ愉びを顔の皺ににじませ、まばらな尺に近い白髯をしごき
「こら。おい。その隅つこに居る若い野郎、何んだ貴様は。いやに頭をテカテカ光らせやがつて……」
と見物のうちにハイカラ頭の青年を見つけ、先づ惡罵を一發投げる。
「男のくせに、油を頭に塗るなんて、あゝ、これも共和民國なんてとんでもねえ毛唐かぶれの流行か。その油の臭ひだけでも胸糞が惡くなる。民國共和、何をぬかすか。天にはお天道様はたゞ一つ。國に天子がなくて何をする。國會議政、何いつてやがるんだ。強盗、スリ、巾着きり、そんな奴らと政事を議する。馬鹿もいゝ加減にしろツてんだ」

國會時代にはこんな痰呵をきる。
「今度は國民黨と來やがつた。ハツハツ、狸と狐に變つた政黨政治、嘘つき名人、賄賂儲けの惡黨だらけ。宋子文、孔祥熙、蔣介石、孫文の馬鹿忰の孫科、女房緣者の天下取り、勝手我儘天下御免、お前たちには解るめえが、あの高いお陽様を見ろ。ボロ／＼泣いて御座らツしやる。俺たち天橋黨の方がどんなにいゝか知れねえや」

時勢がいはゆる南北統一に移ると、彼れはかっいつて國民黨に當りちらす。それが爲、彼れ大兵黃は何度舌禍に罹つて警察に引ツ張られたか知れない。それでも豚箱から娑婆に戻ると、例の如くやらかす。何とも手のつけやうがない。
「なんだ蔣介石が豪い。聞いて呆れて屁がねばらア。旗色惡るけれア命欲しさに直ぐどこへでも逃出す奴ぢや。そこへ來ると、吳佩孚將軍だ。たゞの一度だつて、外國租界へ匿れたことがあるか。中國一の男は何んといつたつて吳佩孚だ」

吳佩孚を賞めるは／＼。
「この天下一の吳佩孚將軍は、俺のこの飴を毎日召上つて御座るのだ。お前の飴を食つてわしも男らしうなつたぞと俺に仰言つた」

忽ち巧みな氣轉をみせて商賣。肩に掛けたズタ袋いつぱいの怪しげな藥飴が見てゐるうちに賣りきれる。

彼れ姓は黃、名は德勝、山東人。姜桂題馬玉崑に仕へ、南京の革命戰に大刀を翳して黨軍十餘人を斬倒したのが大の自慢。張勳復辟の失敗後、心氣一轉飴賣になつて今日に及び、天橋の怪人として誰知らぬ者はない。時節柄「北京巷談」の一つ。

可園雜記

加藤新吉

徐州・隴海線

既に去年の話になるが私は十月徐州に二泊して開封に向ひ、十一月徐州を通過して南京に向つた。その頃秋播の小麥は畠一面を薄綠に染めて、火野葦平の麥と兵隊を思出させ、徐州會戰を思出させた。

徐州は古の楚の彭城、項羽が都して西楚の覇王と稱した所といふ。劉邦が興つた沛、項羽が圍まれた垓下、何れも甚しく遠からず。漢以後は徐州の名で通つた。此處で見たものでは雲龍山上と公園とにころがつて居る畫象石、降つては鐵佛寺に殘る北齊と覺しき石の佛頭が最も古く、蘇東坡の築くところといふ舊き黃河々道の堤防に最も興味が惹かれた。

今の徐州は埃つぽいこと夥しい汚い町、飲料水も恐ろしくわるい、謂はば黃土とその泥濘にまみれてゐるやうな町である。恐らくその最初も黃土の堆積と其中をうねる泥水との傍に發生した聚落であつたらう。換言すれば水陸交通の便に因て、特に黃河が近くを流れた時代には其水運に因て發達したのであらう。今日河流は遠くへ去つたが津浦隴海兩鐵道の交叉點として明日への期待がかけられて居る。

隴海線は海州に起り徐州、開封、洛陽を經て陝西省に入り甘肅を指す。隴は陝西から甘肅へかけて呼んだ古名である。支那では運河でも官道でも鐵道でも舊來の交通路は殆ど南北に連つてゐる。それは北人南方を支配するか、南人北方を支配するかを問はず、過去の歷史が主として南北の關係から成立つてゐることに起因するかと考へる。ただ、江河を別にすればこの隴海線だけが東西を結ぶ唯一の例外である。

思ふに今後いろいろの意味でこの隴海線は問題になるであらう。其一つはこの鐵道及沿線を北支那と見るか否かである。南北支那の境界を淮河の河谷と秦嶺山脈の稜線とを結ぶ線なりとする地理的皮人文的見方に從へば此線は勿論北のものである。河北・山東及山西を北支とする日本人一部の近來の俗說に從へば南のものである。舊黃河を界とすれば全く南に入り、今次の決潰に因る新黃河とすれば半ばは北に屬する。歷史を讀むと宋金對立の昔、宋は金軍の南侵を防いで黃河を決潰したことがあつた。其頃これに似た境界の問題がやはりあつた。八百年を隔てて又同じやうな問題を蒸返すことになるとすれば變なものである。

陝西・甘肅から更に西への道は蘭州涼州・肅州を經て新疆に達し中央アジアに達する。これは有名な玉門關を通り天山南北路を通る西域街道であるといふより、歐亞大陸交通の古き表街道であつた。新疆の沙漠化と船舶發達との結果この道はいつしか裏道となりやがて廢れてしまつたが、來るべき日には當然歐亞交通の表街道として復活するであらうし、またさせる必要もある。が、現在はソ聯が其途を塞いでただ彼等だけの東方への道になつて居る。從て隴海線及其延長は我等からいへば消極的には所謂防共ルートである。併し問題は彼等が出るか我等が進んで行くかだ。天下の公道を開け、俺が通るのだと、東亞民族が毅然として宣言する日がやがて來なくてはならない。私は學窓を出て滿洲に渡つた頃、天山路の秋風を聽く日を夢みて拙文をものしたことがある。爾來二十年、まだその若き日の夢をすてない。

正月を迎へに滿洲苦力歸る

季節の渡鳥——滿洲苦力が歸つて來た。これらの苦力は陽春の三、四月頃農耕苦力と一緒に山東河北から入滿した鑛工苦力達で現場の結氷と共に郷里にお正月を迎へるため歸つて來たものである。天津站ではこのために連日大多忙を極め苦力輸送に汗だくである。歸郷する鑛工苦力は約二十萬、その多くは津浦線を下つて妻子の待つ田舍に歸るのだが、列車の都合で一泊しなければならない。天津站はこれらの苦力で氾濫し、ホームや待合室の土間にはボロの蒲團を投げ出して眠つてゐる者さへある。苦力の收益は月平均三十圓から三十五圓位で、毎日コツコツと辛抱しながら一錢、二錢と零細な金を殘して郷里へ送金するのであるが、昨年度の送金額は已に二千萬圓に上つてゐると云はれる。

愛護村民二千九百萬に達す

「民路合作」の實現めざし華北交通會社の鐵道愛護工作は今や全治線に行き亙り、現在六千七百ケ村村民實に二千九百萬人に達し、目ざましい實績を擧げてゐるが、こんど同社では愛護工作並に治安工作上の參考資料とするため管下全線に亙り一齊に「愛護村現勢調査」を行ふこととなつた。從來支那ではこの種の調査は極めて不完全で、信ずべき資料に乏しかつたがこれにより愛護村地帶における村民の實勢、實態を一目で知り將來の基礎的指針にしようといふ計畫である。調査項目は人口（性別、年齡、家族）土地（利用狀況—耕地面積）家畜（種別および數量）をはじめ村民の生活生計の狀態、敎育、宗敎などであるが今月二十日から同社警務關係者および村民總動員のもとに着手、來春全線の調査を完了する豫定である。數量的に地域的に正に劃期的大事業として、その成果は大に期待されてゐる。

スラム街天橋に〝愛の泉〟出現

北京のスラム街の眞ん中に日本の女學生の友愛の結晶で美しい井戸が掘りぬかれ、こんこんと湧くその愛の泉は生活に疲れた人人の心をうるほしてゐる——天橋愛隣館にこのほど出來上つた「梅光井戸」がそれである。校長さんの支那土産の繪葉書で「水賣り」の姿を見た下關市梅光女學校の生徒達が『アラ、支那では水まで買つて飲むんだわ』と、寄々相談したのが、北京の貧民窟のまん中に愛の泉をつくらうといふこと、さて集めた金がざつと二百圓、この美談を傳へ聞いた同校校友會や下關婦人嬌風會員なども應援して總額八百圓を北京天橋の愛隣館に送つて來た。感激した愛隣館では早速この金で同館裏手に鑿井工事をはじめ、このほど首尾よく二百尺の地下に甘露の泉をほりあてたのである。同館では早速附近の貧民達に「愛の泉」を汲みなさいと、うれしい通知を出したところ新春早々水汲の人は跡をたゝず、ボロをまとつてお神さんやおできの小僧達が嬉しさうにバケツや石油の空鑵を持つて集つてゐる。梅光井戸はスラム街に咲いた善隣友邦の清い花である。

百萬圓の大樂園天津に出現

土の快感を知らず、紅い煉瓦と冷たいコンクリートの中で蒼白く育つて行く天津の子供達を救ふため、廣い樂園を開放して大空の下で自由に遊ばせ大陸一の健康兒に育て上げようといふ計畫が、華北交通會社天津鐵路局の手で進められてゐる。場所は天津市民の憩ひの地として親しまれてゐる北寧公園で、こゝに立派な「コドモの國」を建設しようと云ふのである。大體百萬圓十ケ年計畫で本年度は先づ二十五萬圓を投じプールを作る外に兒童遊園として驢馬を飼ひ、坊ちやん孃ちやんを喜ばすなどの嬉しい計畫が進められてゐる。尚ゆく〳〵は現在の大禮堂を改築しニュース劇場化せんとする案もあり〝百萬圓の樂園〟は俄然全天津の話題の的たらんとしてゐる。

忘れられた支那武術の復興

衰微の一途を辿り今や支那國民の腦裡から消え去らんとしてゐる支那の武術を、新民會の手で復興しようといふ計畫がある。支那武術は拳、棒、槍、劍、戟、盾等それぞれの奥傳があり上古周末から一般國民に普及され三國志や水滸傳等の武傳小說等に織り込まれて漢民族の血を湧かしてゐたものであるが、最近はこの武術の品位が非常に下落し、僅かに香具師達が客寄せに演ずる拙い技を見るだけであつた。新民會ではかうして衰微しつつある支那武術を振興して、東洋精神の復活を圖らうと云ふのであるが、先づ最初の試みとして北京全市の中學大學生のため、各學校講堂に國術道場を設け、稽古中は矢張り日本の武道試合と同じく防禦道具等を造つて、實地に猛練習をさせることになつた。これが全國に普及された曉には、名實共に支那の國術として精神の鍛錬と品位の向

上に大きな役割を演ずるだらう。

面目を一新する北支の玄關

大陸北支の表玄關口であり北支物資輸送の大動脈として今後の大陸開發經營上最も重要視される塘沽は、今春竣工される天津市と繋ぐ都市計畫並に大築港建設と共に一大飛躍を試みんとしてゐるが、これにさきだち華北交通會社では已に塘沽驛及び驛前埠頭を綜合した大塘沽驛を建設すべく總工費二百五十萬圓を投じ去る九月から埠頭、倉庫、綜合事務所、手小荷物檢査場の新築、驛舍增築の工事を進め大體において今春四月ごろには完成大いに面目を一新する筈である。卽ち驛前白河河岸に築造中である埠頭は延長六百メートルに及びこれを三つに區劃して一つは旅客、二つは貨物となし、一埠頭に三千トン級の汽船は悠々横付も出來るもので貨物年五十萬トンの揚陸も可能である。一方一萬トンの貨物を收容する大倉庫二棟建設並に觀光局、聯銀券引換所、國際運輸などの綜合事務所を建設するもので竣工の曉は大沽バー浚渫工事の進捗と共に北支行貨物の荷揚も敏速となり一面旅客にも上陸第一步に好印象を與へるものとして大いに期待されてゐる。

ミナト・靑島 世界一の夢

大陸國策の線に大きく浮び上がるミナト・靑島の潑剌たる動きは混沌たる事變直後の過渡的現象を解消して健全な建設段階に入つた。目下の邦人人口は二萬八千餘で事變前の一萬七千餘に比し一萬一千增加、この增加率は北京、天津、濟南に比べて低位をみせてはゐるもののこれは最初來靑者の制限がひどかつた關係で、今後他の都市を凌駕することはなんでもないことであらう。また市公署では卽墨、膠縣を編入して世界最大の都市建設に乘り出した。この新靑島市の面積は八千五百七十九平方キロ、東京の十一倍世界最大の紐育の七倍、人口百九十餘萬で東京の三割紐育の二割五分となつてゐる。この新興都市への華人の增加は實に目覺しい數字を見せてをり、この老大都市の人口密度も今後は更に急增し世界一の巨大都市として出現する日もあながち建設者の夢ばかりではないだらう。

北支の內河川 氷上輸送開始

北支の河川は愈々結氷期に入り民船の輸送は已に杜絕狀態におかれ、華北交通水運部の南運河、薊運河、子牙河等は定期旅客運輸を中止し、昨年著しい活躍を見せた中國內河航運公會の大清河民船團も去る十二月中旬解散したが、これ等民船輸送に代る氷上運輸が華北交通會社の手で、河川の全面的凍結を俟つて華かに開始された。氷上運輸には半トン乃至一トンの橇が使用され、薊運河では已に物資輸送の任に當り、好成績を收めてゐる。現在北支にある橇は三千から五千臺で冬季における唯一の民船に代る輸送機關としてその活躍が期待される。なほ天津—保定を結ぶ重要物資ルートたる大清河には警護大橇團が組織された。

蒙古に典型的火山

蒙古に火山がある。寢耳に水のやうなニユースが早稻田大學教授德永重康博士によつてこのほど齎された。由來蒙古は支那大陸と同樣新火山は皆無と考へられてゐたが、昨年夏二ケ月間に亙つて蒙疆地域の地質調査をなした同博士は、黃土が堆積したと考へられる七千萬年から一億年前には蒙疆地域に火山が噴出してゐたことを發表した。これによると火山は京包線聚樂堡驛南方僅か四粁の地點で、驛から見える廣漠とした平地にポツンと屹立してゐる饅頭形の小山がそれで今は火山口の穴もなく煙等の餘燃も出てをらず、昔の活動狀態は認められないが頂上から眺めた形は馬蹄狀で中央に火山噴出の跡が歷然と見られ、殊に興味深いことは素人目にも明かにその四圍には大小多數の火山彈が飛散してをり、その形は典型的な火山岩であると。なほ同博士の發表によれば更に蒙古奧地には、一層典型的で美麗な火山が現存してをり、平地泉驛の北方紅海子附近にも紅格爾圖火山群と稱する火山があるとのことである。

觀光北京の大躍進

觀光北京を物語る昨年度北京市社會局の觀光收入は一昨年に比し約四割四分强の增加を示してゐる。社會局觀光課が中南海公園、中央公園北海公園、萬壽山、紫禁城、天壇等の入場料と觀光バスの乘客數から調査した昨年度北京觀光客の總數は二百七十一萬七百七十四人で、この觀光客の懷から入つた入場料の總額は三十萬九千三百七十七圓七十八錢に達した。またこの二百七十萬を超ゆる觀光客の約六割强が產業視察といふ振れ込みだから、產業發展の飛躍を試みる北京にとつて甚だ嬉しい話である。

一日（舊一月二十三日）
▽黒寺開廟・德勝門外にあり、喇嘛寺である。開廟一日。近年打鬼の儀式を廢してゐるが、大道商人集つて市民多くここに遊ぶ。

八日（舊一月三十日）
▽雍和宮演鬼・北京第一の喇嘛寺で內三區雍和宮大街にあり。演鬼は打鬼（もと西域の佛法から出た惡魔拂の式）の演禮で、この日午後から行ふ。翌二月一日午前六時頃から本式の打鬼式を行ふが兩日共押すな押すなの大賑ひを呈する。午前十時頃から赤や黄の法衣を着た喇嘛僧が法輪殿で讀經し、次に門內の廣庭に出て十四五人の僧が東に向つて讀經する。他の僧は彩衣を着て頭に牛や鹿その他グロテスクな面を被つて鼓をうち鐘を叩いて樂を奏し、それにつれて二人または四人、六人宛中央に出て跳舞する。交互に約二時間も踊つてから五寸足らずの小さく作つた鬼を送り出し門前で焚いて爆竹を鳴らす。一見に値する行事である。

九日（舊二月一日）
▽雍和宮打鬼――前揭參照
▽太陽宮開廟・左安門內にあり、開廟二日。この日太陽生るゝ日、卽ち日の神の誕生日として祀る。

十一日（舊二月三日）
▽祭文昌廟・內五區地安門大街帽兒胡同にあり、文昌帝君（學問の神）の誕生日である。清代には大臣を派して祀つたが民國に入つて廢し、今は一般人士僅かに詣る。

二十七日（舊二月十九日）
▽觀音庙會・正陽門傍下にあり、開廟一日。觀音大士の誕生日である。尙市中の寺廟で觀音を祀つてゐるものは、此の日皆讀經典禮を行ふ。

※　※

（雜事）
▽一日（舊一月二十三日）は小塡倉、三日（舊一月二十五日）は大塡倉と謂つて穀物屋は倉の神を祀り、一般民家でも御馳走を作る。この行事は郊外の農家に行つて見た方がよい。
▽九日（舊二月一日）この日は太陽星君（日の神）の誕生日として、一般に太陽鷄糕を作つて祀る。これは麥粉で作つた團子を五つ重ねその上に寸餘の五色の鷄を作つて挿す。（鷄は太陽を象徵するといふ習俗）
▽十日（舊二月二日）龍擡頭――この日正月中の裝飾を取外す。（昔の中和節である）朝未明に起きて、特に大晦日の夜の接神の式に使つた蠟燭の殘をともして、各室を點檢する。これは年中五毒に冒されぬまじなひ。（五毒は蛇、ガマ、むかで、さそり、げじげじ）
この日婦女は里歸りする。
一般に麵角（麥粉製肉饅頭）を作つて龍の耳を食ふと謂ひ、春餅（圓平の麵粉製、それに野菜や肉などくるんでたべる）を龍の鱗、麵條（うどん）を龍の鬚を食ふと謂ふ。
又飯杓子を以て炕（溫床）をたたき蟄伏する五毒蟲を拂ふと謂ふ。
この日婦女子は針仕事を忌む。龍の眼を傷けるのを恐れると云ふわけ。
▽二十日（舊二月十二日）は花朝と謂つて花王の誕生日である。この日昔は婦女子が色絲で花を造り、樹に挿して金鈴綵旛を掛けた。これは花を護る咒ひで針仕事も愼しんだ。
▽この月は菊や牡丹の根分けをする時である。花木を窖藏する者は隙を開けて風を入れる。
ライラツク、杏の花、梨の花その他百花愈ゝ開く。豐臺の花匠は溫室で種々の花を作り北京に運ぶ。
▽時節の食物、鷄の雛、家鴨の雛（何れも人工養殖）黄芽韮、菠菜、玉白菜、天津海口の大蝦、子蟹、靑哈、白蛤、鯛、石首魚、山東福山の林檎、梨、その他南方から冬筍、蜜柑類、椰子など輸入される。

訂正　二月號「白雲觀の九燕節」とあるは「白雲觀の燕九節」の誤り。

昭和十五年二月十五日印刷納本
昭和十五年三月一日發行

三月號
（每月一回一日發行）

編輯者　北京・華北交通株式會社　營業局資料課　加藤新吉
發行者　東京市麴町區三番町一　長谷川巳之吉
印刷者　小石川區久堅町一〇八　共同印刷株式會社　君島潔
發行所　東京市麴町區三番町一　第一書房
振替東京六四二二三番　電話九段（33）一四一五番　三三四四番

一册定價　三十錢（郵送料一錢五厘）
一ヶ年分　金三圓六十錢

廣告取扱
大阪市西區京町堀上通一丁目二五
一手取扱所　一新社
電話土佐堀九三九

Munaval
-NISSEN-

寄生性・瘙痒性 皮膚病治療劑

ムナバール「日染」

純國産新發賣

ムナバールは化學的に合成したる有機硫黄化合體ヂメチル・ヂフエニーレン・ヂスルフイドにして皮内に滲透して强力なる殺虫作用を發揮し、同時に優秀なる止痒消炎作用を呈する理想的皮膚病藥なり。

【特徴】
一、用法簡便且つ無害・無刺戟にして何等副作用を伴はず。
一、嫌惡すべき臭氣なく且つ衣服類を汚損することなし。
一、品質純良にして約二六%の硫黄を含有す。

【適應症】
疥癬・頑癬・湿疹一切・白癬・水蟲・面皰・汗疱・陰嚢頑癬・皮膚化膿疹・傳染性膿疱疹・皮膚瘙痒症其他寄生性及瘙痒性皮膚諸疾患。

【包裝】
一〇瓦（瓶入）
二五瓦（〃）
一〇〇瓦（〃）
五〇〇瓦（罐入）
一〇〇〇瓦（〃）

NISSEN

製造元 日本染料製造株式會社
大阪市此花區春日出町

發賣元 株式會社稻畑商店
大阪市南區順慶町二丁目

昭和十四年七月四日第三種郵便物認可　昭和十五年二月十五日印刷納本　昭和十五年三月一日發行（毎月一回一日發行）第十號

定價 三十錢